日本福音ルーテル教会
百年史論集
第3号

アメリカ・ルーテル教会の世界伝道(その2)・D.ヴィクナー
山内量平評伝(その2)・坂井信生
座談会「教会建築の歴史と現代」(その2)
《エッセイ》青年・学生伝道・西 恵三

百年史委員会

日本福音ルーテル教会
百年史論集　第三号

目次

アメリカ・ルーテル教会（ＬＣＡ）の世界伝道（その二）……D・ヴィクナー……五
山内量平評伝（その二）……坂井信生……三一
座談会「教会建築の歴史と現代」（その二）……七三
《エッセイ》青年・学生伝道……西　恵三……八三
あとがき……徳善義和……九七

アメリカ・ルーテル教会（ＬＣＡ）の世界伝道

一八四二年―一九八二年（その二）

デイヴィッド・Ｌ・ヴィクナー

二、第三期におけるＬＣＡの役割に関する方針決定

自立／相互依存の時代

将来を見通していく上で、三つの基本的な点を覚えておくことが重要である。第一に、何世紀にも及ぶ全大陸での宣教師の活動の助けによって、今日では地上の総ての国々にキリスト教会が存在するようになったことを、聖霊の働きとして感謝することである。ＷＣＣは一〇〇カ国を代表する三〇一教会によって構成されており、ＬＷＦは五六カ国からの九八教会と、一五の認知された単立教会から成っている（一九八〇年一二月現在）。ローマ・カトリック教会と保守的な福音派教会もまた、この世界的舞台の多くを占めている。時と場所の推移とともに会員数と影響力の度合いは増減するものであっても、歴史の理解と神への信仰とによって、教会はこの世に存続すべきものだと確信させられる。ヨーロッパではキリスト教が衰退を経験しているように見える一方で、サハラ砂漠以南のアフリカでは信じがたいような隆盛が起こっている。まさにこのキリスト教会の存在と状勢、そして世界中での運動自体が、ＬＣＡが今

後の時代に世界伝道の役割をいかに担っていくかへの、直接の影響を与えるものなのである。

第二に、今日の世界においても、教会による伝道の必要がいまだに存在するということである。世界人口の四分の三は福音を聞いたことがないか、部分的に聞いているか、あるいは何らかの歪曲された形で聞いたにすぎない。科学や農業の発達にもかかわらず、世界人口の四分の一は飢えている。栄養不良や病気は、世界中の数百万の人々の発育を阻害し、寿命を短くしている。六大陸すべてにおいて、政治経済や宗教の構造の不正は、無数の人々を恐れや悲惨、そして絶望の中に運命づけている。こうした今日の世界の圧倒的な要請という情況に直面して、ＬＣＡは総てのクリスチャンの共同体とともに、伝道的応答をするように問われている。

第三には、ＬＣＡが第二期から三期に移行するに際して、自己の特定の役割を決定することが最重要である。ＬＣＡはこの運動に貢献するための歴史的、伝統的な資源、神学的考察、宣教学的洞察、資金、人員などを備えている。その貢献は、異なる国々や、人種、文化、そして主の世界伝道の一翼を担う、他の信仰告白の立場にあるクリスチャンの仲間たちの働きを、補足するべきものである。

働きとプロジェクト

この転換期において、関与の範囲と性質とを決定するために、ＤＷＭＥは北米外の総ての活動を、以下のように七つの働き（ミニストリー）と三四のプロジェクトに分類した。

一、クリスチャン共同体（伝道と育成）

プロジェクトとしては、都市や農村、移住者、工業地域への伝道、神学校での神学教育、校外の神学教育、そしてクリスチャン共同体のための指導者養成などがある。

二、情報伝達

プロジェクトは、印刷物、電気通信メディア、そしてグループなどである。

三、教育

プロジェクトは、初等、中等教育、大学、そして地域社会生活のための職業、工業、農業などの教育、さらに海外留学生への奨学金制度などである。

四、保健

プロジェクトは、地域の保健、ハンセン氏病や結核対策、病院や施薬所、看護学校、医学校などである。

五、海外活動管理

プロジェクトは、土着教会の運営、宣教師の海外奉仕、そして活動の企画と評価などである。

六、社会奉仕

プロジェクトは、経済的自立、社会正義、地域開発、そして家庭生活などである。

七、特別グループ

プロジェクトは、老人、視覚障害者、聴覚障害者、その他の障害者に対するもの、そして青年、学生、教授団など、また、災害救済、婦人、難民、重要な人材などを含む。

ＤＷＭＥ計画業務一覧には、三四の全プロジェクトが簡潔に記載されており、それぞれのプロジェクトを通じて伝道局が達成しようと意図している目標が列記されている。各々のプロジェクトには、他の三三との関連における重要性を計る優先順位表示が義務づけられている。

プロジェクト検討の四つの場

ＤＷＭＥが伝道活動をしている世界の急激な変化のゆえに、方向設定と理解の変化に対処する基盤は備わっている

にもかかわらず、これらのプロジェクトは常に検討を受けるようになっている。伝道局は、プロジェクトと計画の内容を検討する四つの場を設定した。

その第一の場は、運営委員会の方針決定に関連する重要な問題について研究する過程である。これまでの主要な研究は、若い教会の相互依存と自立（一九六八年）、宗教間対話へのＬＣＡ便覧（一九七三年）、被抑圧状況に関する便覧（一九七八年）、そして開発に関する方針（一九八〇年）などである。

第二の場として、特定の課題を考慮するための、一連の機能的なミニ協議会を挙げることができる。今後の時代における、働きを準備する戦略と目標とをＤＭＷＥが決定する補佐をするために、一九八〇年三月には一三カ国からの約五〇人の教会指導者がフロリダで会合している。一九八一年二月には、エキュメニズムに関するミニ協議会がフロリダで開催され、次の一〇年間におけるＬＣＡのエキュメニカル運動の方向づけを助けた。この参加者には、主要なＬＣＡ関連の国々や、国際機関、ルーテル教会および、超教派的機関からの代表と並んで、ＬＣＡの指導者、神学者、教会協議会のメンバーなどが含まれていた。

伝道の主題に関するミニ協議会の計画も進められている。その目的は、ＬＣＡの中枢において三つの国際的な伝道協議会の内容を明確化することである。それら三つの協議会とは、一九八〇年のメルボルンＷＣＣ会議、同年開催された福音派のパタヤ会議、そして一九八二年五月にノルウェーのスタバンガーで開かれたＬＷＦ会議である。

第三の場は、一連の地域的ミニ協議会である。キプロスでの一九八〇年と一九八一年の、中近東諸教会代表とＤＷＭＥ役員を含む二つのＬＣＡ中近東宣教師会議から発展して、中近東でのＬＣＡの戦略と目標を方向づける文書が、一九八一年五月の運営委員会で採択されている。一九八〇年一一月には、アルゼンチン、チリ、パラグァイ、ウルグァイなどの南アメリカ南部地域諸国の代表が、ＤＷＭＥ運営委員会ならびに役員代表と懇談し、来たるべき一〇年間における地域でのＬＣＡの関与を形づくる一連の目標と戦略とを立案した。ＤＷＭＥ運営委員会は、この協議会の結

果を一九八一年の会議で承認した。一九八一年一一月には、南アメリカのアンデス地域で同様の会議が行なわれている。

第四は、ＤＷＭＥの役員と運営委員会の場である。そこで特定プロジェクトの内容と目標が毎年再評価され、もし必要とあれば、プロジェクト優先順位を変え、それによって方向を修正あるいは変更している。

伝道関与の方針決定における五つの規準

上記の過程を実施するほか、五つの規準あるいは指針を用いて計画を推進することが有効であると、伝道局は判断している。これらの規準に適合する活動に、伝道局は積極的に参加する意向を示し、もし適切であれば、実際にそのような活動に従事する機会を求めるものである。五つの規準とは以下のものである。

一、活動が現地ならびに地域的な脈絡の中で適切であり、人々が自らの発展の次の段階に進む助けとなるもの。初期の宣教師たちは、彼らが活動している背景となる脈絡に常に敏感であったわけではない。彼らは、自分たちが奉仕した社会を十分に理解しなかったように見えるだけでなく、彼らの周囲の人々には異質な生活様式を、福音と同時に移植したのである。信仰を受け入れた人々は、しばしば西洋の様式の一部をも受け入れた。時の経過とともに、自覚を持った宣教師たちは過去の行為に気づき、教会を「脈絡化」するように試みた。彼らは、土着文化による礼拝様式や建築の刷新を、現地の教会に取り入れようとした。現地の人々はしばしばこの圧力に抵抗した。なぜならば、彼らにとってのキリスト教は、初期の宣教師たちが導入した礼拝式、教会建築、神学的公式等の多くが組み込まれている全く新しい生活様式であったからである。しかしながら、今日では、西洋の影響の衰退と民族的成熟の増大とともに、全く新しい脈絡が形成されつつあり、それは世界中からの力強い運動と、昔からの伝統との結合を反映している。これらの混合は、世界中の宗教、政治、そして経済の機構の中に見いだされる。ＤＷＭＥは、新しい脈絡の真実な部分

をなす活動には、いつでも支援する用意がある。

二、個人かつ共同体への全人的な活動方法をとること。第一期に、伝道団体は、伝道、教育、医療などの国際的な計画を通して全人格に対する関心を示した。第二期には、奉仕機関が全面的な教会支援と支配とから分離し、新しい国際的な奉仕団体が伝道と奉仕の分離を促すとともに、次の時代には全人的な福音全体がどのように実現されるべきかを教会が決定するのが最重要課題であった。人間は体と心と魂の総体的結合であり、解放の福音はその全体的な人間のためのものであるという視点を、われわれの主の説教と癒し、そして教えの働きを回顧しつつ、教会は取り戻したのである。この概念は、一人一人のクリスチャンが他者に仕え、教会が社会に仕える時に具体化される。地域教会は近隣地区の人々に全人的に仕え、教会はより広範な領域で全人的に奉仕する。

今日の宗教的に多極化した世界では、教会と国家との分離が要請されているようなので、国家と世俗団体は、国庫補助による奉仕活動に責任を持ち、教会は自らの資源によるユニークな全人的働きの課題に集中するようになるだろう。助けを必要としている地域に教会が関わる時、それは、言語的な証しや奉仕、それに社会活動などの、さまざまな複合体であるべきである。国家／世俗の事業への教会の関与は、後援ならびに、それらの団体の中で個々のクリスチャンが奉仕するという立場であろう。個人と地域社会に全人的に接していく活動を、ＤＷＭＥは熱心に支援する。

三、活動は、幾つかのキリスト教教派による共同事業であるか、あるいは土着教会へのエキュメニカルな可能性を有するものとする。アフリカやアジア、南米での教派的な教会の確立が正当化された時代はあったかも知れないが、今日では違う。教会が大きく活動的な時には、導入された他の教派との協力の必要は生じない。それが弱小である地域では、多様性ではなく統合性が求められる。中近東の古くからの教会による刷新と布教の計画があり、中華人民共和国の教派以後の教会が、自らが置かれており奉仕している複雑な脈絡の中で、福音に忠実であることを求める時、ＬＣＡは援助の決議をしてきている。

今日の世界伝道の舞台で、信条的な教会としてのＬＣＡの独自の貢献は何であるべきか、という点に関して疑問が挙げられている。もし、ルター派の教会を制度化することでないとしたら、いったい何なのか。伝道局は確固とした方針決定には至っていないものの、ルーテル教会の貢献を、より広範なキリスト教社会において自己の福音理解を示す、という方向においてするように動いてきている。

四、活動は注意深く立案されており、自立の方向への運動計画と、明確な目的と戦略が備わっていること。関連九教会の実質的な自給達成の援助をするために、困難で時には苦痛をともなう過程を経てきたばかりなので、伝道局は依存を助長するどのような活動にも参加しない決意である。自立とは、もちろん自給以上のものである。それは、親教会や団体が自らの資源によって活動を援助でき、責任と幻をもって指導できることを意味している。

五、活動は、時間や資源の貢献における強力な現地での関与を基盤としていることを証明すべきである。ここでの重要点は、奉仕されている人々と奉仕している人々の双方が活動に関係しているという証拠を、活動自体が示していることである。外部の団体が、資金や人員、そして援助を必要とする総ての状況で奉仕活動を維持し展開するための専門知識を供給することなどは、比較的易しい。援助する団体の側には、時間と労力の消耗、そして格段の感性と技術を必要とするが、長期的結果においては、地域的資源への関与と開発を育成するほうが遙かに良いことを、ＬＣＡのような外部団体は学んだのである。

ここで少し他の話題に転換するのも助けとなろう。ＬＣＡは第三期への移行を、いかにも一方的に決めているかのような印象を受ける人がいるかも知れない。もちろんＬＣＡは、プロジェクト目標や優先順位、活動規準、そして特にどの活動に財源や人的資源を配分するかについて、最終的な決定をしなければならないが、この決定に至る過程は研究／ミニ協議会を経過するだけではなく、世界中の若い教会や超教派団体のスタッフとの数多くの多様な国際会議や、進行中の交渉などに、役員が関係することによってなされるのである。この過程は、意見の交換や、関心の共有、

相互学習、そして信頼関係の樹立という結果を生んでいる。多くの場合、ＤＷＭＥのどの決定も誰かを驚かせはしない。なぜならば、それは責任ある人々による各地での会合の進行過程の結果だからである。

もちろん、教会と団体の間には、異なる優先順位や、異なる計画様式、また急激に変化する世界の政治、経済や宗教の状況によって、容認しうる程度の緊張点が生じることはある。そのためにも、決定過程の交渉での開放性と柔軟性とが必要なのである。

現在の第三期優先プロジェクト

傾聴と研究、交渉、また反省など進行中の過程を通して、伝道局は以下のように、第三期での海外協力のプロジェクト優先順位を決定した。

一、クリスチャン共同体（伝道と育成）

伝道局は言語的な福音の宣教と、礼拝と証し、そして奉仕へと、信徒を召し出すことに最優先権を与えている。ＬＣＡの関与の基本的な点は、諸教会や諸団体が自己のプログラムを遂行することに、応えることである。一九八二年にはＬＣＡは一四カ国での三一の都市活動に財政補助を与え、一〇五名の宣教師の働きの貢献をなした。ＬＣＡはまた、五つの国での一五の農村活動に、補助と八七名の宣教師の働きを与えている。それに加え、エチオピアで急速に成長する教会のための低価格の教会堂建設や、ジンバブエでのＷＣＣ後援の独立後伝道協議会などのように、多種多様な布教事業において、伝道局は超教派団体と提携している。幾人ものＬＣＡ宣教師は、教会成長の原則と実践をフラー神学校で研究し、いくつかの国でそれを応用する手助けをしたが、結果はさまざまであった。単一的な構成の伝道方策は社会学的に健全であっても、ルター派が神学的に擁護できるものではない。しかしながら、教会の総ての活

動の中で、伝道を定義し構造化するのは最も困難であるということを、付け加えておかなければならない。伝道はその中に、言語的な証し、臨在、対話、宣教と奉仕と社会活動との関係等の要素を持っており、もちろん、予知することのできない聖霊の働きがあることは言うまでもない。クリスチャン共同体は、植えて水をやり、神が成長を与えるのである。

総てのキリスト教信徒は、近隣や遠方の人々に仕えるように召されていることを認識しつつ、伝道局は、クリスチャンを教会の働きに向けて備えることに非常に高い優先順位を与えている。これは、在学型神学教育機関、校外での神学教育、教会教育などによって達成されているように見える。

一九八一年三月のＤＷＭＥ運営委員会は以下の目標を採択し、今後の時代における在学型神学教育への関与の指針とした。

(1)、海外の在学型神学教育機関は、教職者と信徒の双方の人々を、多様な働きに向けて備える履修課程を設置することが望まれる。それは神学的に健全で、学問的に妥当であり、脈絡的に適切で、土地に根差した表現を持ち、預言者的性格を有するものである。

(2)、海外の在学型神学教育機関は、各種の教科を実験的に試み、学生たちが様々な生活状況や、経済的、文化的階層にある広範囲な人々に福音を伝達できるように、補助されるものである。

(3)、海外の在学型神学教育機関は、最後までエキュメニカルな場で機能するように要望される。ルーテル教会は他の教派に独自の貢献を及ぼし、また他の教会からの貢献によって高められるのである。

一九八二年にＬＣＡは、一二カ国にある一三の在学型神学教育機関と提携し、これらの目標を実現する働きに関与しようとしている。これらの学校のうち一〇校は超教派であり、残る三校はルーテル諸派合同のものである。一六名のＬＣＡ宣教師がこれらの学校の教師として奉仕している。

伝道局は、過去二〇年間に発展した通信教育型の神学教育（ＴＥＥ）を熱心に支持してきた。このプログラムの三要素は、学生が通常の仕事の場で学ぶこと、彼らの置かれている脈絡のために特に準備された教材を用いること、そしてそれらを学ぶ際に実践の機会を持つことなどである。これに参加するための指針を鮮明にしつつ、一九八一年三月のＤＷＭＥ運営委員会は次の目標を採択した。

(1)、ＴＥＥプログラムの計画と開発、そして現地でそれを実施する人々に（北米と海外の双方で）訓練を与える企画を開発するように、ＤＷＭＥは求める。

(2)、ＴＥＥプログラムの、地方での孤立化を防ぐ助けとして、人員と資源、そして意見の交流を計る機会に、ＤＷＭＥは呼応していく。

(3)、ＤＷＭＥは、海外の現地同労者との協力関係の中で、目標や方法、神学校やＴＥＥプログラムを含む、働きへの養成のさまざまな手段の効果などを比較しうる評価手順を設定することを求める。

(4)、ＤＷＭＥは、ある国の教会や団体の働き人養成のための全体的な関心から遊離して、ＴＥＥプログラムが開発されないように、一国家や一地域内の神学教育の枠組みに関連することに努めるＴＥＥプログラムを支持していく。

(5)、ＤＷＭＥは、教会や学校、そして団体などが、ＬＣＡの神学教育のための資源との接触を持つだけにとどまらず、他教派や、エキュメニカルで国際的な団体の資源への接触をもはかるための回路として仕える。（たとえば、ＷＣＣの「神学教育プログラム」（ＰＴＥ）等）。

一九八二年には、アジアで五つ、アフリカで二つ、そして南米で二つのＴＥＥプログラムにＬＣＡは関与した。それらのプログラムには、六名の宣教師が参加した。今後の時代には、ＴＥＥプログラムの実質的な拡大が期待されている。

二、情報伝達

近年、伝道局は印刷や電気通信メディアへの関与を減らしてきている。しかしながら、地域での印刷メディア計画を、「適切である限りにおいて、訓練や配備、資本化、そして専門的指導」などを通して援助するのはもちろんである。経費の増大や、所定の地域内でのラジオやテレビ番組と教会間でのフォローアップ作業の繁雑さの問題もあって、伝道局は、将来における参加の機会を模索しつつ、中庸的な海外関与の時代に入った。伝道局は、世界各国の教会で徐々に成長しているグループ・メディアの活用について、興味をもって注目している。それらは過去と現在の上に構築されており、音楽、ダンス、物語の朗読、詩歌、そして種々の絵画的な芸術を含む。

急速に変化するメディアの状況により、伝道局の過去の関与を評価し、将来の役割を企画するために、情報伝達に関するミニ協議会を経済的に支えることが重要である。

三、教育

第一期と第二期を通じて、ＬＣＡは初等、中等教育に深く関与してきたが、香港や日本とタンザニアそして中近東の高校に六名の教師を派遣していることを例外とすれば、現在の関係は最低限度に押さえられている。さらに付け加えるならば、香港と日本の教師たちは、彼らの学校から給与を支給されている。これら総ての教師たちは、指示に従って、学校と教会での奉仕に彼らの時間を割り振りしている。伝道局はアジアの一〇の大学に相応の援助を与え、一九八二年には七名の教師を派遣している。

初等、中等教育において適度な関与を保つべきか、あるいはさらに減少すべきかを伝道局は検討する一方、地域社会生活のための教育と呼ばれるものの支援には高い優先順位を置いている。このプロジェクトへのＤＷＭＥの目標は

自明である。

(1)、恵まれない人々が、自分たちの地域社会へ、霊的、社会的、経済的、政治的に責任をもって関係していくために、必要な最低限の学びを提供していく。

(2)、読み書きと算数の全般的能力の達成は、世界中で追求されている。また、文書や印刷物の世界に接近することにより、社会的、経済的、知的、そして霊的な恩恵を享受できるように、ほとんど文字を理解しない人々の読解力を増大させ続けるための援助が必要である。

(3)、クリスチャンの人々が聖書を読み、研究することにより、人格的成長や、さらに意味ある家族的貢献、そして仕事や日常生活において、より効果的な証しができるための助けが必要である。

(4)、特権的な者も権利を持たない者も同等に配慮し合い、分かち合う人々の共同体の構成員としてはぐくまれ、地域社会の霊的、物的、教育的、社会的、政治経済的必要に敏感であり、仕えることができるようになる。

一九八二年に、伝道局は共同体生活のための一〇の教育プロジェクトを支援し、そのうちの七つは超教派的に運営されている。

四、保健

教育的な働きと同様に、ＤＷＭＥの保健業務への関与も近年は大幅に変化してきている。伝道関与の当初からＬＣＡは医療活動に着手してきた。単独に、あるいは他の教会や団体と協力して、アフリカやアジアでのさまざまな場所で医療施設が設置された。それらは、施薬所、病院、看護学校、医学校、そしてハンセン氏病と結核などのセンター等であった。経費の上昇はもちろんのこと、新しい政府の発展や個人的な事業などの理由によって、ＤＷＭＥはこれらの形での医療業務への関与を減少することを決定した。医療経費の上昇のために、伝道局が関与する施設の数は減

少したにもかかわらず、これまでのところ全体的な支出には著しい削減は認められない。医療奉仕機関からの離脱を達成するには長期間が必要である。伝道局が撤退する際に、教会の関与を呼び掛けるチャレンジングな機会が時々表面化する。

伝道局は、今後の期間において、地域の保健に高い優先順位を置く。治療医学の重要性を軽視するのではなく、全人的奉仕の一環として、教会が予防医学に主要な援助を与える時がきたと信じるからである。地域の保健に含まれるものは、栄養、免疫、保健教育、グループ活動、家族計画、そして病人の世話などを地域社会が支えること等の課題である。伝道局の地域保健のための目標は以下のように記されている。

(1)、海外諸教会に属するより多くの個別教会が地域保健プログラムを先導すること。
(2)、ＤＷＭＥに支援されている医療機関が、治療医学から予防医学に重点を置き換えること。
(3)、ＬＣＡに支援されている総ての地域保健や予防医学の業務が、計画や実施の段階から、その地域での他の保健業務と提携していくこと。

五、海外活動管理

伝道局は、それぞれの地域の教会の運営を優先順位表の最後に置いている。だいたいにおいて、若い教会の運営のためのＤＷＭＥの支援は、一九八三年に終了する予定である。しかしながら、種々の状況において、関連する海外諸教会や団体からの要請があれば、ある期間だけ、ＬＣＡの宣教師が管理的地位で仕えることがあるかも知れない。

六、社会奉仕

社会奉仕での四つのプロジェクトは、経済的自立、社会正義、地域開発、そして家庭生活等であり、それらはＤＷ

ＭＥの基金配分の優先順位では、比較的低い地位を占めている。その基本的な理由は、ＬＣＡがＬＷＦのワールド・サーヴィス、ＬＷＲ、ＷＣＣのワールド・サーヴィスなどを通じて、海外のほとんどの社会活動の任務を遂行しているからである。

一九七二年以前には、ＬＣＡの海外活動において、世界伝道局と国際的な超教派団体との間には、ほとんど協力関係はなかった。総ての海外協力関係を一つの部門に統括することで、ＤＷＭＥの存在は統合に向けた大きな一歩であった。現在は多くの相互連絡網の中で、伝道局は超教派団体の中での決議過程に参加し、同時にＬＣＡの全海外協力関係を見守ることができる。

社会奉仕活動について、伝道局は二つの声明を起草し、採択した。一九七九年に採択された文書には「被抑圧状況に関する便覧」という題がつけられており、四つの分野について方針が示されている。種々の背景からの要請に基づき、ＤＷＭＥは被抑圧状況にある海外教会と団体とを支援する用意がある。被抑圧状況下で活動する宣教師たちは、状況を理解し、伝道局が彼らを支援するという信念のもとに、彼らの判断に基づき、細心の注意を払って行動することが求められる。いかなる特定の被抑圧状況に関しても、それに言及して自らの立場を明確にする場合は、必要とあればＤＷＭＥがその立場の展開と伝達を補佐するという理解のもとに、ＤＷＭＥがＬＣＡを代表することが期待される。ＤＷＭＥは三つの北米系の伝道局と協同し、ＬＣＡの教会員が海外の被抑圧状況を自覚し、効果的な行動に移れるように助言するであろう。

多くの世俗的および宗教的団体によって、開発の議題は研究されてきているが、今後の時代に、この重要な分野における自己の役割をどう見るかについて、自分たちの声明を起草し、結論に導くことが助けとなるとＤＷＭＥは信じる。「開発に関する方針」（一九八〇年）についての声明は、下記の優先行動順位によって結論づけられている。

(1)、正義、自由

多くの場所で見られることであるが、開発によって生活の質と環境とに劇的な進歩を受けうる人々は、また同時に、開発資源への手段にはほとんど気づかず、それを持たない人々である。彼らは、土地を持たず、貧しい人の中でも貧しい人々であり、無力である。彼らはこの世で軽蔑され、剝奪され、抑圧されている。彼らが自分たちの立場を自覚し、他の可能性に気づくとき、そこには希望と絶望とが入りまじっている。開発のみならず、彼らの窮状は、彼らが犠牲になっている政治、経済、社会機構の変革をも要請している。彼ら自身の福祉に関して、自ら采配を振るおうという願いから生じる開発は、地域の段階ならびに、ある地方や国家、そして世界という脈絡で、早晩、正義と自由の問題に直面しなければならない。

ＤＷＭＥは近年、不正行為、抑圧、発言権や権力のない人々を擁護する事項、などに関する立場を研究し、採択している。開発への経路として、ＤＷＭＥは公正で自由な社会を推進する活動に、高い優先順位を置くであろう。抑圧からの解放と、自己実現に向けた働きと、より大きな社会正義を擁護する人々の努力を、ＤＷＭＥは支持するであろう。

(2)、婦人の役割

開発運動は、これまで男性による男性の利益を志向するものとして偏重されてきた。ほとんどの伝統的な社会では、地域社会の経済と家庭の幸福への貢献は、婦人に負うところが大きい。しかしながら、通常は、彼らの社会的地位は男性に従属してきている。特に公的な事柄については、婦人は、加入、計画、開発計画の恩恵を受けることなどから除外されてきている。

たとえば、多くの開発は農業に焦点をしぼっている。世界の婦人の半分は、開発途上国の農場に居住し、労働している。これらの国々の農業生産物の四〇から八〇パーセントは婦人の力に依存している。しかしながら、開発の企画者たちは、食物の生産と売買における婦人の重要な役割を無視してきた。農産物の現金化の主張は、

いつも男性を益するものであった。市街地や工業地域で、婦人たちは安価な労働力としてしばしば搾取されている。教育や訓練、そして近代化していく社会の一画に参加していく準備などにおいて、婦人の持つ機会は男性以下である。

開発の中での男性偏重は、やっと今になって一般に認められてきている。もし開発が、社会正義や自覚、尊重、自己実現、真の共同体、そして生活の質などを含むのであれば、開発の中での婦人の立場の重要性は、緊急かつ特別の注意に値する。婦人の地位と利益に影響を及ぼすいかなる開発活動も、厳密に検討されなければならない。ＤＷＭＥは、加入、計画、参加と、開発からの恩恵などの点で婦人が完全に無差別待遇を受ける活動に、高い優先順位を置いている。

(3)、構成員の教育と自覚

生活を維持する物資や奉仕の過不足という点で見ると、世界の多くの開発途上地域は、過開発された世界の小さな部分と鋭い対比をなしている。社会正義は、この不均等の是正を要請しているように思える。開発のひとつの目的は、開発途上国とその国の人々に、開発国の人々が享受している機会や能力、そして資源等の入手手段を与えるものであった。しかし、開発は相関的なものであって、この目的は達成されていない。開発国と開発途上国との格差や、一国内の社会格差は拡大している。世界の開発された地域から開発途上地域へという形で、開発が単純にひとつの方向に進むことはありえない。それは相互的なものであり、開発国は「開発」を必要としているのである。

このことは、開発が生活の質を含むものとして理解される時に、最も明らかになる。開発国と呼ばれている国の人々の価値観や生活様式、生産や消費の形式などは、厳密な再検討を迫られている。この過程には、意識形成のため、グループと共同体、そして相互依存的な世界のために最も適切な、生活の質と種類を決定するた

めの意図的な目標設定などが含まれている。

ＤＷＭＥは、ＬＣＡの会員や私たちの社会の中で、教育と意識化の努力をしていく責任を持っている。ＤＷＭＥは世界各国の人々の経験や洞察、そして理解などを手に入れる手段を持っており、それは私たちの教会と社会の両方について、価値観と生活様式を厳密に評価するための、見通しを与えている。私たちは、私たちの生活の質を検討する過程の一端を担う人々を、北米外に求めることができる。ＤＷＭＥは、教育と意識形成をＬＣＡの会員や北米の人々の間で行なうに際して、ＬＣＡの他の部門や、ルーテル諸派や超教派団体との密接な協力に高い優先順位を置くであろう。

七、特別グループ

伝道局は重要な人材や青年、学生、そして教授団などへの牧会的配慮に高い優先順位を与える。これまでに北米外で、難民たちのグループに仕える責任を引き受けてきたこともある。一九八二年には、このような難民への牧会配慮は、ベルリン、ブリュッセル、カイロ、ヘルシンキ、エルサレム、シンガポール、ストックホルム、東京などの八都市で実施されている。障害を持った人々への奉仕と救済計画とは、基本的には超教派団体の出先機関によってなされている。

三、他のＤＷＭＥの全体的機能

エキュメニズム

ＬＣＡは、教会が一九七二年に再編成されたとき、世界伝道とエキュメニズムを一つの部門に統合したにもかかわ

らず、ＤＷＭＥ関連のエキュメニズム局が形成されたのは一九八一年になってからである。この結論に到達するには九年の経験が必要であった。北米伝道局「社会における教会」部と同じく、この局は教会生活の総ての部分に及ぶものである。

ＬＣＡの憲法において、教会を指導する力と目的は、

「総てのルーテル教派の統合のために努力すること……」

「クリスチャンの一致を育成すること……」

「他の信仰の共同体との関係を発展させること……」

「善意の力と協調して働き、共に発言していくこと……」などである。

（ＬＣＡ憲法第五条第一項のｅ、ｆ、ｇ、ｈ）

一九七二年のダラス総会において本質的に要請されたのは、新しいＤＷＭＥがＬＣＡの構成単位となり、これらの目的達成の助けとなることであった。これは、一四〇年の海外伝道関与から生じてきたＤＷＭＥの世界各地での直接の関係や、ルーテル諸派や超教派団体、そして教区や各個教会と共に働くＬＣＡの各部門などによってなされてきている。

この任務遂行のため、伝道局は四つの主要な活動分野に関与してきている。

第一に、伝道局は、教会がエキュメニカルな立場の文書を作成するのを援助してきた。それらの幾つかは、『洗礼、聖餐、職務』というＷＣＣ文書のような、超教派団体の公文書への応答として起草されている。他のものは、ＬＣＡの対応を求める超教派的対話から生まれてきている。現在、伝道局は、聖公会からの聖壇と講壇の交わり樹立を考慮することへの呼び掛けに対して、ＬＣＡが応答を作成するための援助過程にある。

他の見解表明文は、ＬＣＡ自体によって着手されるかもしれない。この良い例としては、一九八二年のルイスビル

総会で、エキュメニズムに関する声明文を伝道局が起草し、ＬＣＡに提出したものがあげられる。

第二に、伝道局が関与しているのは、ルーテル諸派や超教派の委員会、理事会や運営委員会などで仕えているＬＣＡ人員の選定や、オリエンテーション、伝達事項、カウンセリング、そして報告事項などである。それらの人々がＬＣＡの公式代表であるか否かはともかく、情報と洞察を相互に共有するための経路が開かれていることが重要である。ＬＣＡに影響を及ぼすような決定がなされる場合に、伝道局はＬＣＡに諸団体の決定や動向、そして洞察などを情報提供するのはもちろんだが、そうした代表者がＬＣＡの立場や特定の事項に対する考えを知っていることが肝心である。

第三に、ＬＣＡのエキュメニカル財政補助金はすべて、伝道局を経てなされている。財政補助金には三種類あり、ＷＣＣやアメリカＮＣＣ、そしてＬＷＦやルーテル世界奉仕部（Lutheran World Ministries）などのようなルーテル派や超教派団体への参加費、次には、ＷＣＣの世界伝道理事会（Commission on World Mission and Evangelism）や、ＬＷＦの教会協力理事会（Commission on Curch Cooperation）、キリスト教医療理事会（the Christian Medical Commission）、そしてキリスト教コミュニケーション世界連盟（the World Association for Christian Communication）などのように指定された伝道プロジェクトのために諸団体が用いる補助金があり、他は北米の諸団体が地域での特定プロジェクトに用いるための補助金である。ＬＣＡの補助金額は、団体とＤＷＭＥそしてＬＣＡを含む交渉の過程で決定される。ＤＷＭＥがこの過程に参加している特典の一つは、財政的な決議過程を通して、ＬＣＡの指令や手引き、そして優先順位などの総てが適用されることである。

第四に、ＬＣＡ各個教会と教区、そして教会間団体との情報伝達の経路はたいへん改善され、情報や分析、協議、エキュメニズムに関する決定などは自由に行き来するようになった。この水路に注がれるべき一つの重要な情報は、世界のルーテル諸派や超教派、あるいは宗教間の働きで得たＤＷＭＥの経験である。その中に一方的なものは何もな

い。それは常に、他のルーテル教会や、他教派のクリスチャン、そして他の宗教の者とさえも協同していくものである。

宣教師人事

伝道局が、現在、歴史の中で置かれている場を振り返るならば、ＬＣＡの海外宣教師の役割についての考察がなされなければならない。一八四二年以来、ＬＣＡは会員の中から海外で宣教師として仕える者を送り出してきたが、必要があり、また教会が世界的な相互依存の共同体である限り、今後も続ける予定である。これまでに示されたように、第一期には宣教師は指導者であり、第二期には援助者であった。第三期には状況は異なってくる。

過去数年間で、アフリカ、アジアそして南米などの歴史的にＬＣＡが関連してきた九教会の地域で働く宣教師の数は激減している。この減少の基本的な要因は、教会内や関連奉仕施設での現地職員と宣教師との役割交代と、こうした過渡期には宣教師の数が少ないほうが得策であるということによるものである。たとえば、これまでかなり多くの宣教師勢力を有していた二つの場では、三名にまで数が減らされた。

ドルの切り下げによる財政的逼迫と物価上昇、そして過渡期の不安定さにもよって、宣教師総数は一九六八年の五二七名を上限として、一九八一年には二五八名に減少している。

九教会以外の地域でも宣教師が働ける可能性が表面化してきたので、伝道局を通してＬＣＡの人員は、以前の九カ国とは対照的に、今日では二九カ国で働いている。この同じ期間に、ＤＷＭＥの人事担当者へ寄せられる年間二〇〇〇通もの照会状からも判断できるように、海外で奉仕するＬＣＡの人員について、著しい関心が高まってきている。

ＬＣＡの宣教師人員への申し込みは、アフリカ、東アジア、ヨーロッパ、南米とカリブ海域、南アジアと中近東、などの五地域の事務局長を経て、世界の各地の教会や団体から来ている。専門職としての資格は、牧師、教師、医師、

看護婦、医療技術者、農業指導員、経営管財人などの仕事に適合してはいるが、個人的な資格は皆同じである。専門職にある総ての妻や夫、独身者たちは、彼らの任務が何であれ、宣教師とみなされている。彼らは訓練や地位を基準としてではなく、必要とされる度合いに応じて俸給を受ける。彼らに不可欠の個人的資格はクリスチャンとしての献身、信仰を表明できる能力、柔軟性、創造性、そして独立心などである。人事選考の過程は、適材適所を目標としている。

今日、伝道局は、青年宣教師、有期限宣教師、無任期宣教師などの三種類の宣教師を海外に派遣している。

第一の青年宣教師とは、最近の大学卒業者で、高校での英語教師、または青年担当者として地域教会で働くために三年任期で派遣される者をさす。以前は幾つかの国々にこうした配置がなされていたが、現在の活動は香港と日本に限られている。

第二の有期限宣教師とは、ある限定された期間、特定の職務のために海外に赴く人々のことである。この契約には、任期と配置だけではなく、俸給や生活維持に関する事項も含まれている。第三期には、こうした形での派遣が増加し、このような取り決めのほうが欠員補充のためにも受け入れやすいので、今後の時代も増えていくことが予測される。

第三の無任期宣教師とは、伝道局に加わるときに、海外での長期奉仕の可能性を約束した者である。第一期の宣教師のほとんどと、第二期の宣教師の大部分がこの類に属するが、今日、数は減少してきている。いろいろな問題が表面化してきている中で、長期宣教師の分類はこれからの一〇年から二〇年の間には重要でなくなるかも知れない。若い教会が発展を続けるとき、特定の任務や交換プログラムなどを除くならば、現地の働き手の数と質とが、国外からの人員の必要性を取り除いてしまう可能性ははっきりしている。

しかしながら、伝道局が社会を総体として見ると、今後の期間に、専門教育を受けた新しいタイプの宣教師の可能性を想定することができる。こうした人物は、神学的な訓練を受けた「何でも屋」であり、必要な委託を受けており、

生得の才を有し、世界の主要な文化的／言語的地域に対応し、可能な部署があれば教会内外のどこででも人々に仕える開放的気質を備えた者である。これらの人々は、任を受けた場所での専門家になるだけでなく、ＬＣＡと彼らの専門業務との間に情報伝達の有効かつ必要な経路を設けることができるであろう。世界を見回して見ると、ＬＣＡがそのような人々の幾人かを派遣したいと望むのは、八つの地域である。すなわち、南米、西アフリカ、東アフリカ、中近東、インド、東南アジア諸国、中国、そして日本である。

情報宣伝活動

伝道局の、海外活動とＬＣＡとの基本的な接点は、ＤＷＭＥの情宣部にある。その目的は、海外宣教に向けてＬＣＡ会員の熱意を促し、海外での諸行事や動きを知らせ、自らの責任を世界的な共同体の一員として自覚し、彼らの行動や怠惰が国際的な意味を含んでいることを知るようにさせることにある。情宣部は目的達成のために、印刷、視覚教材、各種会議、海外セミナー、そして宣教師と現地の人との一対一の接触などの方法を世界中で用いている。そして幾つもの超教派団体やルーテル諸派の団体と密接に協同している。この局は、広報局、ルーテル教会婦人連盟、地域教会奉仕局、北米伝道局、そしてＤＷＭＥとの関係に責任を持つ各教区の委員会などと協力関係にある。

ＬＣＡ各局間の関係

過去数年間に、ＬＣＡの他の三つの局との関係が緊密になってきた。ＤＷＭＥは、海外に関係する社会的声明文の起草や、北米外での社会問題に対してＬＣＡが関与している事柄について、また北米を含む世界各地の教会の伝道を解釈すること、そして指導養成局と共に移民や宣教師に当たる海外の牧師をＬＣＡに加える作業などにおいて北米伝道局と協同してきた。

海外からの宣教師をＬＣＡが要請したり、受け入れたりすることは、まだ始まったばかりであり、海外の若い教会や国際的超教派団体との検討を必要とする事柄である。海外の牧師のＬＣＡ受け入れに関して、指導養成局と協同して、ＤＷＭＥは海外への神学生インターン派遣の仕事をしている。ＤＷＭＥは指導養成局との接触の増加をはかり、神学教育の交換研修を海外と北米の間で行ない、それによってＬＣＡの神学校の教授や学生たちが、世界の出来事に目を開く助けとなるような改善方策がとれることを期待している。

世界の状況をＬＣＡ会員に伝え、会員が思考形態や生活様式を変革して真に相互依存の世界を目ざすように促すことなどに関して、来たるべき将来には、ＤＷＭＥと地域教会奉仕局の間に関係の増大が見られるであろう。

結論　伝道に関する声明

第三期の概要を表明するために、ＤＷＭＥ運営委員会は、一九七九年三月に、伝道に関する次のような声明を採択した。

「伝道とは神の積極的な愛への応答である。

この愛は、神が総ての人々のために送られたイエス・キリストを通して現わされたが（ヨハネ三章一六節、一七章二三節）、

それ以前にもイスラエルの人々への使者を通して（使徒行伝一〇章三六節）、

宇宙創造と世の祝福の時を貫いてすべての始まりの時以来、

そして今日も、神の臨在と（マタイ二八章一九―二〇節、一八章二〇節）力の約束（使徒行伝一章八節、ローマ一章一六節）を通し、神の民を導く聖霊を通して、現実のものとなっている。

それゆえに、神が伝道の原動力である。

この伝道は、彼らの内にあった神の姿を損なってしまった人々に関心を持つ。伝道は世界に関心をもつが、その世界とは、親が子を愛するように神が愛し、しかもまさにその民によって傷つけられた世界である。

これらの損なわれた人々と傷つけられた世界のために、神は救いのみ心を表明する計画を持っておられる。この計画の中心には、イエスを信じる者の交わりであるキリスト者共同体がある。彼らの使命は単純な福音を語り、それに生きることである。人類への和解の業は神の愛の行為であって、それは恵みによって与えられ、信仰によって受け入れられる。

この計画に加わるキリスト者共同体の主な動機は、神の恵み深い行為への感謝であり、福音の祝福を分かち合いたいという願いである。さらに、彼らもまた伝道への召命に応え、従順に神の命令に従い、行き、告げ、行なう、……。なぜならば、彼らは終わりの時のしるしと使命として、行き、告げ、行なうことのうちに、貧しい者、囚われた者、そして抑圧された者への、キリストの関心を持つのである（ルカ四章一六―二一節）。

キリスト者共同体の構成員は、神の救いの業と莫大な富の、ほんの一部分しか自分たちは理解していない、という認識に導かれる。ゆるされた罪人として、謙遜と、畏怖と、驚きの中で、彼らはひれ伏すのみである。この共同体が神から来る単一さを反映し、教会として一致し、世に仕えるというキリストの願いの前には、誇りとごう慢さの入り込む余地はない。

なぜならば、伝道は神の愛への応答であり、キリストにある教会を通して、この世のために仕えるものである。

それゆえに、

ＬＣＡの世界伝道とエキュメニズム局（ＤＷＭＥ）は、各個教会と会員が北米外の信仰共同体に加わる媒体となり、

神が一人一人の罪人を愛しておられること、

イエス・キリストを通してわれわれをあがなってくださったこと、
日々のゆるしが与えられていること、
そして神は、ご自身が創造し、保ち、大切にする子供としてわれわれを知っていてくださることの、驚くべき、
喜ばしき、良き知らせを証しするのであり、
信仰に満たされた罪人を、礼拝と、証しと、奉仕の共同体へと召し集め、
そこで、彼らは福音を伝え、
隣人を愛し、
教育と、祈りと、祝いのために集まり、
政治経済と社会状況に対して発言するのであり、
人類が集団として生きるようにとの神の意志を告げ、
家庭において、
社会集団において、
経済関係において、
政治制度において、
一人一人の価値が認められるように、
すべての発展が促進されるように、
正義が守られるように、
全被造物を通して、全自然の中での神の創造的な働きに加わっていくのであり、
社会的、経済的、政治的、霊的な義と、身体的な福祉のために働き、

災害に対応し、
一国による収奪に反対し、
個人と共同体の双方における人類の可能性の発展を阻害する社会制度に挑戦していくのである。
ＬＣＡのＤＷＭＥの使命は、各個教会や会員が、適切な情況において神の民に加わるための媒体となることであり、
普遍的な教会の一致を確認し、
世界中のルーテル教会の交わりを明らかにし、
北米のルーテル教会の調和を守るために、自らの責任の範囲で働き、
祝い、研究し、証しをなし、奉仕することで他のキリスト教会や団体と協同し、
異なった信仰の人々や団体とも、誠実に対話や活動を行ない、
社会正義の戦いでは、教会外の善意ある諸組織とも適切に協力し合っていくのである」。

（中川俊介訳）

山内量平評伝（その二）

坂井　信生

三、第三期　佐賀時代

(一)、最初の伝道地佐賀

一八九二年（明治二五年）二月二五日、太平洋の荒涛をこえて横浜に無事到着したガディック号で来日したシェラーは、直ちに居留地東京築地一二番地の仮寓に入った。早速、彼は日本語教師に山内量平を紹介され、日本語の習得に努めるとともに、日本の事情をつぶさに研究し、東京周辺をはじめとして伝道に最適の場所の選定に意と時を用いたのである。しかしながら、シェラーが最終的に選択した伝道地は、意外にも、当時としてはまったく辺鄙な九州の佐賀であった。やがて、シェラー、ピーリー、そして山内夫妻によってこの地での宣教が展開され、日本福音ルーテル教会創設の地となるのである。ここで、佐賀が最初の伝道地として選ばれるにいたったいきさつを述べておこう。

米国南部一致ルーテル教会は一八八八年(明治二一年)、新たに外国伝道局を設置、日本伝道に関する決議を行ない、日本伝道のための慎重な人選を試みた。これに対して、サウス・カロライナ州チャールストンの神学校を卒え、さらに医学をも学んだグッドマンが、一八九〇年（明治二三年）六月、伝道局に日本派遣宣教師志願を申し出て受理された。たまたま、彼の友人でバージニア大学卒業のブラッドバリーが佐賀県尋常中学校（のちの佐賀中学校、現在の佐賀西高校）の英語教師として佐賀に滞在中であり、日本伝道開始の場所について書簡を送るということがあった。し

かしながら、グッドマンは個人的事情が生じて辞任を申し出たために、代わってシェラーが選ばれてルーテル教会初代来日宣教師の栄誉を手にしたのであった。

幸いにして、シェラー自身もこのブラッドバリーとは知己の間柄であった。伝道地選定にいささかの困難を経験していたシェラーは、ブラッドバリーに書状を送った。これに対し、彼はすでに中学校教師辞職の意志をもっており、その後任としてシェラーを推薦するとともに、佐賀が伝道地として最適であることを示唆し、彼の佐賀来訪を求めたのである。シェラーはブラッドバリーの招請に応じて佐賀への調査旅行に出立した。シェラーはこの調査旅行とその成果についての詳細を伝道局長ホールン博士に、一八九二年(明治二五年)一一月一二日付で佐賀から報告している。[1] 以下、この書簡を中心に、シェラーが佐賀を最初の伝道地として選定し、伝道局に同意を求めるにいたるプロセスを概観しよう。

シェラーはこの年の一一月初旬に東京を発ち、途中大阪で開催中の日本基督教会の大会に出席している。[2] ここで佐賀伝道の体験を有し、のちに佐賀に定住することにもなる当時長崎在住のオランダ改革派教会宣教師オルトマンズに会った。彼はシェラーに佐賀の状況を語り、伝道地として佐賀または小城の可能性を示しながらも、佐賀にはなさるべき多くの活動分野のあること、またミッション・センターとしては大きな町を選ぶのが得策であることなどをアドバイスしている。

一一月九日に佐賀に到着したシェラーは、ブラッドバリーの客となり、種々の問題点をフランクに論じ合った。ブラッドバリーは中学校英語教師として一八八八年(明治二一年)九月に着任[3]以来すでに四年以上を経過し、翌一八九三年(明治二六年)三月までの契約であった。しかし、彼は英語教師よりも宣教師として働くべく辞任の意志固く、すでに南部メソジスト教会宣教師として神戸に招聘されていた。彼は可能な限り早く神戸に転じたいと後任の人選を急ぎ、シェラーを強力に推したのであった。その理由は次のような点にあった。

ブラッドバリーは佐賀滞在四年間に、一日四時間週五日の多忙な英語教師を勤めるかたわら、個人的に宣教活動に多くの時間を割き、私宅で中学教師・生徒に、あるいは市内協和館で佐賀キリスト教青年会のためにバイブル・クラスを主宰していた。[4] 彼はすでに多くの青年がキリスト者となっており、この基礎の上に数カ月を経ずして組織された教会が創設されるであろう、と確信していた。このブラッドバリーの活動を継承することは、新たに伝道を開始しようとするシェラーにとって、願ってもない有利な条件となるものであった。つぎに居住旅券の問題があった。当時、外国人の居留地外居住には制限があり、日本人による正規の雇用者でない限り雑居は許可されなかった。中学校教師ということであれば、この問題は難なく解決され、佐賀市在住が容易に可能となるのであった。また、中学校教師という地位がおそらくは排他性の強い佐賀において信頼をかち得る条件となり、伝道活動を幾分でも有利に展開できるであろうことも考慮したと察せられる。さらにブラッドバリーは、欧米人向きに内部を改装して使用していた家屋を、神戸移転後にシェラーが借用する便宜をも申し出ている。[5]

これに対して、シェラーは九州が南北カロライナに似ていると非常な親しみを感じ、とくに佐賀には「日本に到着して以来他のどこよりも佐賀に at home な感じをもった」と好意的な印象を述べている。彼はブラッドバリーの佐賀における体験と伝道の可能性についての見解を詳細にきくと同時に、彼自ら佐賀のキリスト教事情を多方面にわたり調査したのである。[6] 当時佐賀では、ローマ・カトリック教会、メソジスト教会、聖公会、[7] 日本基督教会（オランダ改革派教会）がすでに伝道しており、日本基督教会は佐賀市の西部、与賀町新地に一八九〇年（明治二三年）会堂建設を終えていた。[8] 佐賀滞在中、シェラーは日本基督教会の川崎敏雄牧師、メソジスト教会の日本人牧師（氏名不明）とも会い、佐賀伝道の実情を問い、聖公会は信者グループのみ存することを知った。そして、カトリック教会が佐賀で最も便利な場所にあった説教所を放棄したことをきき、「そこがマルチン・ルーテルの教会によって確保されるということはありえないことではない」と並々ならぬ意欲をもらしている。[9] ともかく、実際的な伝道活動は日本基督教会の

みであり、人口二五、〇〇〇を数える佐賀市のクリスチャンは五〇人弱にすぎず、とりわけ、佐賀にはこれまで外国人宣教師が定住していないことに格別の関心を寄せているのである。[10]

さらに、シェラーはオルトマンズが語った小城をも訪問している。彼は小城にも好印象をもち、佐賀、小城、そして両者の中間にある四つの村での説教所開設の可能性に大きな期待を示している。やがて、佐賀が伝道地として選ばれ、宣教が開始されると、小城そしてその中間の久保田にも説教所が開設されることになる。このことについてはのちに再びふれることにしよう。

(二)、佐賀十字教会

前項において述べたブラッドバリーとの面談、そしてシェラー自身による佐賀およびその周辺地の踏査の結論は次のようなものであった。すなわち、中学校教師として多くの時間を割かれる難点があるとしても、「私はこの地佐賀以外に、われわれの伝道を開始するよりよき場所と考えられる他の町、村、市を、日本のどこにも知らない」ということである。[11] 帰京後、シェラーは直ちに新着の同労者ピーリーとも相諮り、佐賀を伝道地として推薦する書簡を伝道局宛に送った。伝道局はこの二人の見解にもとづき、伝道地を佐賀とすることに決定、折り返し応諾の返書を彼らに発送したのである。[12]

シェラーは当初から日本人ヘルパーの必要性を痛感していた。[13] とくに、佐賀赴任が目前に迫った時、この問題は緊急を要する案件であった。シェラーとピーリーは彼らの日本語教師であり、「真理のための活動は止まるところを知らず、貧困者や最下層の人々の間での牧会」[14]の経験を有している山内量平に白羽の矢を立てた。彼らは山内の「すぐれたキリスト教的性格に強く印象づけられており、われわれ（米国南部一致ルーテル教会）の宣教活動に最適であること[15]を痛感していた」からである。また「成功裡に婦人伝道師（Bible woman）として一貫して活躍していた」[16]山内の

妻幹枝をも彼らの伝道チームに加えうることは、彼らにとってさらなる幸運であった。

この突然の申し出に、山内夫妻はおそらく驚きと当惑とを禁じえなかったと思われる。伝道を開始してようやく基礎がかたまった東京深川教会の牧会を中断し、新来の他教派宣教師に全面的に協力すること、しかも、はるか西国の佐賀に赴任することは、かなりの決断を要するものであったに相違ない。義弟植村正久とも幾度か相談を重ね、助言を求めたことであろう。この間の山内夫妻の複雑な胸中を語る記録は何一つ存していないが、つまるところ、彼らはシェラー、ピーリーとともに佐賀へ赴任することに同意したのである。

シェラーは直ちにブラッドバリーに宛てて、中学校英語教師就任応諾の返書を送った。この報に接したブラッドバリーは、早速後任人事の手続きをとり、シェラーの就任が県当局により承認されるや、一月三一日新任地神戸にむけて佐賀を離れた[17]。新たに中学校英語教師に任じられたシェラーは二月四日に着任、佐賀市南堀端の元多久屋敷に宿を定め、八日県庁に中学校長下条幸次郎に伴われて着任の挨拶を行なった[18]。この時シェラーはピーリーを東京に残して単独で赴任したのであるが、その理由として、「佐賀の如き偏避（ママ）の市街に、同時に二人の外人が入りこむことは、市民の心に動揺を与へて、其の反抗心を昂むる動機」となることを考慮した結果と伝えられている[19]。しかし、そのこと以上に、ブラッドバリーが離佐を急ぎ、後任者シェラーの早期着任を切望していた事情が存し、したがって、伝道地としての佐賀選定がいたって短期間になされたことから、山内の東京深川教会の今後の問題あるいは身辺整理などに若干の時間を要し、まずシェラーが単独で赴任し、のちにピーリーと山内が佐賀へ発ったと思われる。彼らの到着は三月一五日であった[20]。ただし、幹枝の佐賀到着は家事整理のために一カ月余おくれた四月二〇日であった。

佐賀に到着したシェラーには、県尋常中学校で週五日一日四時間の英語教師の激務がまっていた。雇用契約では学校におけるキリスト教宣教を固く禁じてはいたが、自宅で私的にそれを行なうことは自由であった。しかし、当座には福音の宣教開始の試みはまったくなされず、山内らの到着をまって始められることになる[21]。

シェラーにおくれること一カ月半、佐賀に来た山内が最初にしなければならなかったことは、何よりも伝道用の土地家屋を入手することであった。山内は市の中心部に説教所として使用可能な家屋を探し求めた。一旦契約を終えても、それがキリスト教説教所として使用されることが判明すると、どの家主も契約を取り消したという[22]。おそらく、彼は五年前に東京での説教所探しの苦労と困難を想起したことであろう。たまたま一医師所有の荒れはてた家屋を松原町明治橋通に見いだし、法外な家賃ではあったが借用し、これに大修理を加えて仮会堂として[23]「佐賀十字教会」と名づけた。そして、ほどなくこの仮会堂で日本における最初のルーテル教会礼拝が行なわれ、一九〇〇年（明治三三年）[24]市内花房小路に教会堂が完成するまで、「セントラル・チャペル」と呼ばれて佐賀伝道の拠点となるのである。

山内の次の課題は、ピーリーの佐賀在住許可である。シェラーと同じく、学校教師であることが最も無難な解決策であった。山内を校長にセントラル・チャペルを会場に当て、英会話を主体とした修業期間四カ月の「英語夜学校」[25]を設置することにし、ピーリーを教師に任じることでこの問題の解決を計った。この英語夜学校は週三回夜に開かれ、初心者と上級者の二クラスからなり、生徒は男子のみであった。ピーリーは「佐賀の人々は、正しくも、キリスト教教育のために建てられた学校だといい、その子供をこの夜学校に入れるのを嫌がっている」と語り[26]、シェラーは「この夜学校は彼（ピーリー）の旅券確保の目的で開設された。この夜学校が本質的にキリスト教的活動の一部とみなされなければ、もっと多くの生徒を得ることができるだろう。しかし、われわれはこの夜学校をキリスト教的活動の一環とみなしている」とのべている[27]。この夜学校は、一八九五年（明治二八年）まで続けられた。

山内量平の努力の末に見つけた仮会堂の大修理もようやく完成し、ピーリーの佐賀在住に目途がついた四月二日イースターの夕、この場において待ちに待った最初の礼拝がいとも厳粛にとり行なわれた。この礼拝こそ日本福音ルーテル教会の記念すべき最初の礼拝であり、この日こそは日本福音ルーテル教会誕生の日なのである。ピーリーはこの夕べの礼拝を次のように記している[28]。

佐賀での最初の公のキリスト教の礼拝は、一八九三年（明治二六年）三月二日（ママ）のイースターに、この礼拝所で行なわれた。シェラー氏と私もうまく言葉が話せないので、集会は山内さんによって進められた。会衆は少数であった。市の西側にある改革派教会から来た数名のクリスチャンが、私たちをはげますために親切に参加してくれた。そしてたくさんの恐らく未信者たちが、珍しい光景を見ようと、家の前に集まった。それは故国でのキリスト教の礼拝とは、大分変わっていた。私たちは土地の習慣に従って藁のマット（畳）の上に座った。部屋は小さくて、道路寄りの端は解放していたので、外にいる人々は見ることも聞くことも出来た。讃美歌と祈祷は、私にはまだよくわからなかった。集会は静かに進められ、私たちは実際に自分たちの伝道地で、祝福された福音の説教を始めたことで、勇気づけられ、幸いを感じた。

㈢、草創期の佐賀伝道

一八九三年（明治二六年）四月二日のイースターに最初の礼拝が行なわれて以来、はじめの数カ月の間聖日礼拝は一切なく、明治橋通りの会堂で週二回の公開説教会を開いて、市民にキリスト教の何たるかを紹介するための集会が続けられた[29]。シェラーとピーリーは、ともに山内による日本語学習を継続していたとはいえ、いまだ不充分であり、こうした説教のほとんどは山内の責任であった。この年早くもピーリーは説教者としての山内について、「彼は本当に熟達した説教者（really an accomplished preacher）であり、もし彼がアメリカの教会の人々に英語で説教することができるならば、彼の説教は故国のわれわれの教会からも高く評価されよう」と述べているほどである。彼はまたのちに、「山内牧師は興味のある教育的な説教者である。彼の説教は全部福音的であり、聖書にあふれている。多くの日本人牧師は政治や倫理を説いて、祝福された福音を無視している。彼はまた注解説教者でもある。彼の説教は熟慮さ

れたもので、区分がはっきりしている」とも評している。[30]

他方、山内は未だ按手礼を受けておらず、ルーテル教会伝道師（宣教師は彼をhelperと呼んでいる）として、宣教師からルター神学についての手ほどきをうけた。しかし、彼がほとんど英語を解さないのと、宣教師の日本語が充分でないために、遅々として進捗しないことをシェラーは嘆いている。とはいえ、山内が『小教理問答書』を理解し、とりわけ聖餐に関しての山内の見解がルーテル教会的であることには満足の意を表している。[31]

佐賀は葉隠の里であり、尊皇攘夷論の中心地の一つでもある。したがって、外来宗教であるキリスト教に対する敵意と偏見には、ことのほか根強いものが存していた。たとえば、『佐賀新聞』が報じるところによると、一八八五年（明治一八年）一二月に、おそらくオランダ改革派教会佐賀講義所（のちの日本基督佐賀教会）主催と思われるが、与賀馬場定小屋で開催された「耶蘇教演説会」で聴衆が散々に悪口をあびせて混乱に陥ったという。[32]こうした反キリスト教的な出来事はしばしばであった。仏教界はむしろ反キリスト教キャンペーンを大々的に行ない、一八八九年（明治二二年）には「佐賀県尊皇奉仏同盟会」が元町の称念寺を中心に組織された。「耶蘇教の蔓延防止」をスローガンに幾度となく演説会を催し、門徒に排耶思想を吹き込んだのである。[33]

このような状況のもとでの宣教活動は、開始当初から数多くの困難と障害に直面せざるをえなかった。ピーリーが記すところであるが、「集会のたびに、説教者に侮辱的な態度で、怒号や妨害が行なわれた。時には石や泥が家に投げ込まれ、集会をぶちこわすために、あらゆる手段が構（ママ）じられた。時には妨害がひどくて、集会を中止することもあった。毎晩のように、礼拝所はそこに止るのが危険だと思われる程、石を投げ込まれた。ある時は集った暴徒があばれて始末におえず、警官を呼んだ」[34]という。別のところでは「われわれはしばしば騒々しい群衆にかこまれる。最近、幾度もわれわれの礼拝が暴徒によって中断させられた。彼らは外に立って説教者の説教に粗暴な野次をとばし、説教を止めさせようとする」とも記し、こうした暴徒に対して、かつて巡査部長の経歴をもち豪儀あふれる山内が「その

取扱いに非常になれているかのように、とても上手に対処してくれた」と山内に感謝の意をも表している。[35]このように、山内の役割は説教者、日本語教師のみでなく、暴徒に対する警察官の役割をも担っていたのである。

しかしながら、彼らは果敢にこうした困難と障害をのりこえて、着々と伝道戦線を拡大していった。この年の六月より会堂で日曜学校が開設された。[36]山内夫妻とくに幹枝は日曜学校教育のベテランであり、やがて次々と開設される佐賀市内外の日曜学校の中心となるのである。開設当初の日曜学校生徒は一五名ほどで多くはなかったが、定期的によく出席した。彼らにはこの夏に出版された『少教理問答書』が教えられた。[37]

七月九日には日本福音ルーテル教会最初の聖餐式が執行された。陪餐者は二人の宣教師、山内夫妻など七名であった。この日の説教も山内によってなされている。特筆すべきはこの聖餐式で、ピーリーが日本人学者（大塚義信か）の協力を得て翻訳を続けていた『公同礼拝式』（Common Service）の聖餐式の部分が使用されたことである。[38]ただし、この時の式文はまだ出版されておらず、手書き（manuscript）のままであった。

さらに、この年の秋には若津（現福岡県大川市）に説教所が開設された。シェラーは一八九四年一月一八日付書簡で、「佐賀では毎週二度の説教礼拝が開かれ、神の言が平均五〇名足らずの聴衆に宣べ伝えられている。若津では神の言が毎週語られ、時折説教礼拝が開かれる。……昨年のイースター以来、七名の者に成人洗礼を授けた。一人の子供が洗礼を授けられたが、その両親はその前に教会に受入れられていた。そして、三名――われわれの二人のヘルパー（山内量平と幹枝）をふくむ――が他教派から教育ののち、信仰告白をして受入れられた」と一年間の活動の成果を報告している。[39]

佐賀教会最初期における山内の大きな功績の一つとして忘れてならないことは、鈴木直丸（のちの山内直丸）を招いたことである。伝道戦線の拡大にともない重要な懸案は、すぐれた日本人伝道者を加えることであった。山内はきわめて熱心にかつ勤勉に伝道活動に従事したが、すでに一人の人が耐えうる限界に近い状況にあったからである。和

歌山出身の鈴木は一八八四年（明治一七年）、山内と同じくJ・B・ヘールより洗礼をうけ、のちに上京して明治学院神学部に四年間学んだ。その間、彼は東京深川教会で山内とともに働いた経験も有している。山内は明治学院卒業を前にした鈴木に書簡を送り、佐賀でルーテル教会のために働くことを勧めたのである。東京の長老派ミッションはこのことに格別の理解を示してくれたので、鈴木は佐賀に来ることになった。一八九五年（明治二八年）のことである。彼はルーテル教会の要請に応えるために、他の多くの将来性のある申し出をすべて断わったという[40]。鈴木は翌一八九六年（明治二九年）六月、山内の妹熊子の長女で山内の養女となっていた綾と結婚、山内姓を名のることになる。

鈴木の来援を得て、当時西説教所と称されていた米屋町講義所はさらに進展し、東説教所として材木町に、さらには、かつてオルトマンズが伝道地として示唆していた小城、そして久保田にも伝道が開始された。はじめは山内がこれに当たっていたが、のちに鈴木がこれに代わっている[41]。やがて、この小城伝道の成果が小城教会として結実することになるのである。

ここで、シェラーが記している一八九六年（明治二九年）はじめ頃の一週間の活動を要約しておこう。

日曜の朝、会堂で日曜学校をもち、若津に行くピーリーを除いてすべてが出席する。校長は山内で、分級は山内の妻、鈴木、シェラー夫妻が担当する。説教はそれに続いて一〇時に始まるが、礼拝では主要な音楽部分をふくむ礼拝式文を用いている。四人の説教者が順番で説教に当たる。午後一時半に別の日曜学校がある。これは北説教所（西説教所か）で開かれる。ピーリー夫人が助手で、山内夫人によって行なわれる。三時半、シェラーが会堂で教理問答クラスを教える。求道者のみでなく、教会員の大部分も出席している。とくに未信者に向けられた夕礼拝は七時に始まり、鈴木とピーリーが多くこの説教に当たっている。

月曜日、山内夫妻はトルクマ（久保田村徳万か）に行き、かなりの出席者のある集会をもつ。火曜の夕、山内は北説教所で説教をし、鈴木は若津に行く。水曜日、山内は一、二名の求道者がいる伊賀屋（現佐賀市兵庫町）を訪れる。

山内夫人、シェラー夫人は南説教所（東説教所か）で「日曜学校」を開き、夜には説教会をもつ。木曜日には会員宅で婦人会が開かれる。鈴木は小城で説教をする。

実に多忙なスケジュールである。シェラーはさらに筆を進めて、山内夫妻および鈴木を比較して、宣教師が直接的な伝道活動に携わらない余暇をよほどもっているのに、彼らは多くの時間を費してほうぼうに出かけ、残った時間は求道者と語りあっている、と山内らの献身的な伝道活動の有様を伝えている。(42)

㈣、教会組織と山内の受按

佐賀に単独で最初に着任したシェラーは、中学校教師の激務と、身を挺しての伝道活動のゆえに健康を害ね、伝道局は彼に有給休暇をあたえたので、一八九六年（明治二九年）帰国の途についた。(43)ピーリー、山内夫妻をはじめ佐賀の教会員は、伝道の中心人物の帰米で大きな悲しみにつつまれた。しかしながら、伝道局は一八九八年(明治三一年)、ブラウン夫妻を佐賀におくり、伝道陣営の再強化を計った。この年にはデンマーク系ルーテル教会の宣教師ウィンテルも来佐、教会発展の期待はいっそう大きなものとなった。さらに、一八九六年、シェラー、ピーリーによってはじめられた神学クラスで学んでいた三名、すなわち、小池袈裟雄、医師の久米祖迪、大阪から参じた山内の友人和佐恒也もこの戦列に加わった。(44)

こうした宣教師、伝道者たちの活動により、一八九八年（明治三一年）には佐賀教会会員数は六〇名をこえるにいたった。もっとも会員に移動があったりして、現住陪餐会員は三五名程度であった。伝道開始以来、み言葉の宣教と聖礼典を執行し、いわゆる「教会」の機能のすべてを果たしてきた佐賀の教会ではあったが、いまだ教会組織にまではいたっていなかった。そこで、この年の六月一九日に会員の総意にもとづき佐賀教会組織が成立したのである。ルーテル教会の教理と伝統とに完全に一致する憲法が満場一致で採択された。四名の指導的男性が選ばれて執事に任じ

られ、山内量平が未受按ではあったが初代牧師に推挙された。さらに、教会はそれ自体の財政をも負担し、伝道局側は毎月一定額を補助することとなった[45]。名称もこれまでの「佐賀十字教会」から「日本福音路帖教会」と改められたのである[46]。

それからおよそ半年を経たのち、日本福音路帖教会の成長におけるさらに重要なステップを刻した日を迎える。佐賀では教会の組織化についで、当然のことながら山内牧師の按手の問題が生まれてきた。正しく組織された教会は受按牧師を有すべきであったからである。長老たちは山内の受按を求め、しかるのちに彼を改めて牧師として招聘することを考慮していた。こうして、伝道局に同意が求められ、山内量平とともに、当時熊本で開拓伝道に従事していた山内直丸も按手礼をうけることが承認されたのである。

按手礼を前にして、老若両山内の組織神学、教会史、聖書神学、それに個人的信仰に関する試問がピーリー、ブラウンにより行なわれた。すでに述べたように、山内量平は神学校で体系的に神学を学んだ体験はなく、彼のルター神学、聖書、教理に関する知識のすべては、その個人的読書、勉学によっているにすぎない。しかし、試問に当たったブラウンは次のように述べている。試問に際して山内は「とても手際よく、またいい意味での常識をもって応答した」と。他方、山内直丸は神学教育をうけていたために、「彼の応答は非常にすぐれており、欧米の大部分の神学生のそれに匹敵するものであった[47]」と。

山内量平、直丸の按手礼は一八九九年（明治三二年）一月二九日、厳粛かつ喜びのうちに執行された[48]。この時には『礼拝式文』(Book of Worship)から完全に日本語に訳されたものに従って行なわれた。この二人のおごそかな按手の式の証人となるべく三〇名をこす教会員が参会した。敬愛する老若両山内が神の言葉の上にその手を置き、キリスト・イエスにある真理にまったき服従を誓うすがたは、彼ら教会員にとり常ならざる光景であり、感激にあふれて涙を禁じえない人々が多くみられた[49]。こうして、日本福音ルーテル教会最初の邦人牧師が誕生したのである。

山内量平が「牧師」として聖礼典をはじめて執行したのはこの年のイースターである。このイースター礼拝では、まずピーリーが四名の堅信式を行なった。これは佐賀で行なわれた最初の堅信式である。次に、山内が二名の男性および一婦人に洗礼を授けた。イースター説教は山内がなし、とくにこの日新たに教会員となった兄弟姉妹に対する実際的な勧めが熱心になされた。説教ののち聖餐に移り、ピーリーと山内が三二名の陪餐者に配餐を行なった。陪餐者は聖壇のまわりに集まり、半円形になって畳の上に座してパンとぶどう酒を受けたのである。山内にとり、洗礼式を執行し、配餐を共にすることはこの時が最初であり[50]、最も大きな喜びにみたされた一日であったと推察される。

教会が組織され、正式に牧師として山内量平を迎えた佐賀ルーテル教会の次なる課題は会堂の建築であった。つねに五〇名を前後していた礼拝出席者には、民家を改造しただけの「和風の仮礼拝所では狭隘を感ずるやうになった」ためである[51]。一八九八年（明治三一年）一月に会堂建築委員会が発足し、この目的のために教会員が毎月献金することを定めた。その結果、この年だけで一二五円の献金を数えたという[52]。翌年の三月、教会にふさわしい場所に位置する土地[53]を購入、伝道局からの援助を得て、市内の花房小路（水ヶ江二丁目、佐賀ルーテル教会の現在地）に教会堂が完成し、松原町明治橋通から移転した。一二月一三日に捧堂式が挙行され、ピーリーが司会、山内が説教の任に当たった[54]。なお、この歴史的会堂は一九五二年（昭和二七年）に佐賀教会堂を改築したおりに、佐賀県杵島郡大町町に移され、現在、大町教会会堂として使用されている。

一九〇〇年（明治三三年）に、日本福音ルーテル教会最初の総会ともいうべき第一回教役者会が佐賀で開催された。この教役者会で興味をひくことの一つは、ルター神学がことのほか強調されていることである。ルーテル教会の按手礼を受けたとはいえ、長老派の背景を有する両山内牧師、短期養成の伝道者にルター主義をいっそう徹底させるためであろうか。ピーリーが「路帖神学に於ける神の道（ことば）の地位」、ウィンテルが「路帖神学に於ける聖礼典の地位」、ブラウンが「オーグスブルグ信仰ヶ條の歴史」とそれぞれ題する講演を行なっている。さらに、この教役者会で『路帖教

報』と題する機関紙発行を決議、山内直丸が編集発行人となるが、一九〇二年（明治三五年）に廃刊を余儀なくされ、新たに山内量平の責任のもと『路帖新報』と改題されて再刊されることになる。山内はかつて『福音新報』の編集発行の体験を有しており、彼の編集のもと、教会員久本吉次が経営する久本如鳩堂活版所の印刷で、同年六月二五日第一号を発刊した。[55] 今日の『るうてる』の前身であることは言うまでもない。

この『路帖新報』に記載されている当時（一九〇二年）の佐賀教会の集会案内を記しておこう。[56] この頃の佐賀における説教は主に山内と和佐恒也により行なわれている。「佐賀市内に於ける公会（ママ）説教は山内、和佐両氏にて受持たる。其度数は毎週六回より少なからざるよし」[57]と。

日曜日　午前九時　日曜学校、同一〇時　礼拝説教、同午後八時　説教　花房小路佐賀教会　牧師　山内量平
月曜日　午後八時　説教　明治橋通　佐賀東説教所　担当　山内量平
火曜日　午後八時　説教　米屋町　佐賀西説教所　担当　和佐恒也
木曜日　午後八時　説教　筑後国若津港下本町若津説教所　担当　和佐恒也
金曜日　午後八時　説教　片田江裏新道　立茲青年会館

㈤、山内幹枝のことども

ここで山内幹枝の活躍について若干のページを割くことにしよう。幹枝は夫量平におくれること一カ月余の一八九三年（明治二六年）四月二〇日に佐賀入りして以来、婦人伝道師（Bible woman）として、とりわけ日曜学校と婦人会活動に精力的に従事した。この年の六月、はじめて日曜学校を開設しえたのも彼女の尽力によるところ大であったし、各地の説教所で日曜学校を主導したのも彼女であった。[58] シェラーが一八九四年度（明治二七年）の日曜学校クリスマスの様子を故国のルーテル教会に報じているが、二四にも及ぶ盛りたくさんのプログラムをはじめ、クリスマス・

ツリー、室内装飾、そして出席者に贈る多彩なプレゼントの選定など、この日のすべては幹枝の周到な準備によるものである。このことは出席した生徒父兄のみならず、多くの人々がキリスト教に接する絶好の機会をも提供することになった、とシェラーは記している。[59]

また、幹枝は多忙な中にありながらも、時には単独で、時には宣教師夫人を伴って、あらゆる手がかりを求めて訪問伝道を行なっている。ピーリー夫人は幹枝に同行したおりのことを、まさに「大晩餐会のたとえ」（ルカ一四・一五―二四）さながらに、断る理由を「一人は家の掃除で忙しい、別の人は歯痛である、第三の人はともかく行けない、という」と記して、訪問伝道の困難さを語っている。[60]しかしながら、幹枝はそれに臆することなく訪問伝道を続けたのであった。

幹枝はさらに伝道開始直後から婦人会を組織し、その育成指導に当たった。会長は宣教師夫人であったが、[61]毎週一回会員宅で開催される婦人会集会では、聖書が読まれ、讃美歌がうたわれ、幹枝が聖書研究を担当している。「私は聖書と讃美歌を前に、円座を作って集まる婦人たちを見るのが楽しみである。私たちはエペソに宛てたパウロの書簡を（山内夫人を通して）学んでいる」とピーリー夫人は語っている。[62]幹枝の婦人会指導は、のちに博多あるいは大阪着任後も直ちに開始されている。

佐賀における幹枝について特筆すべきことは佐賀幼稚園の創設である。すでに述べたように、幹枝は田辺において幼稚園設立の必要性を痛感し、一八八七年（明治二〇年）に念願の幼稚園開設を試みている。[63]しかし、その事業も上京によって彼女の手をはなれることになるが、幼児教育に対する関心は佐賀において再び燃え上がった。姪（幹枝の妹くにの遺児）松枝を助手に、幼児を集めて「佐賀幼稚会」という保育事業を計画、そのために小さな家を求めて開園しようとするが成功しなかったことが伝えられている。[64]

一九〇〇年（明治三三年）リッパード夫妻が伝道局より派遣されて来佐した。リッパード夫人はとりわけ幼児教育

に関心を示しており、「好機逸すべからず」と幹枝は夫人に念願の幼稚園設立を要請したのである。その結果、一九〇二年（明治三五年）「同夫人の令姉より恩物其他一切の器具の供給を仰ぎて、一〇月一日より開園」[65]の運びとなった。しかし、実際には一〇月二〇日に開園している[66]。当初定員一二名の予定であったが、入園希望者が多く二五名に入園を許可した。保育は月、木、土の週三日、朝九時より一一時までで、リッパード夫人、幹枝が保育を担当している[67]。この佐賀幼稚園はリッパードを設立者として、一九〇五年（明治三八年）四月一八日付で、時の佐賀県知事香月輝の名で設立認可を受けたのである[68]。

ルーテル教会宣教師および山内量平夫妻が、一八九三年（明治二六年）に佐賀において伝道を開始して以来、伝道地は熊本、久留米、大牟田と拡大し、伝道従事者の数も増してきた。日本福音ルーテル教会は一九〇三年（明治三六年）に開教満一〇年の記念祝会を、ゆかりの地である佐賀でもつことになった。この機会に合わせて、第五回教役者会も開かれた。四月二日の開教記念祝会では、ピーリーが「日本伝道の由来」を、また山内量平が「日本路帖教会の歴史」を語った。山内はルーテル教会の招聘に応じた事情からこの日にいたるまでの歴史を述べ、ユーモラスなエピソードは聴衆の笑いを誘い、また迫害時の有様は伝道がいかに困難かを悟らせるなど、山内の話術の巧みさが伝えられている。この祝会の席上、一〇年間の最大の功績者であるピーリーおよび山内夫妻に教会員より純金製指環が贈られている[69]。

なお、この開教満一〇年を記念して静處生こと山内直丸が「日本福音路帖教会十年史」を執筆、『路帖新報』第一八、一九号に連載している。しかし、山内夫妻の佐賀着任までで終わり、未完であることはまことに残念と言わざるをえない。また、この「十年史」を執筆するに際して「山内（量平）牧師の説教、教会の記録、及び八年間余が経歴して得たる材料」を用いたというが[70]、今日、これらの何一つ残されていない。こうした資料が現存しているとすれば、初期の佐賀における宣教師をはじめとする山内らの活躍がより明確に再現されえたことであろう。

四、第四期　博多時代

(一)、各派キリスト教の福岡伝道

日本福音ルーテル教会が一八九三年（明治二六年）に宣教開始の地として佐賀を選定して以来、満一〇年の記念祝賀会を開催した一九〇三年（明治三六年）までの間、その中心は佐賀であったと言っても差し支えない。新規の伝道はすべて佐賀を拠点に、佐賀からなされているからである。すなわち、六年目の一八九八年（明治三一年）には、当時九州の政治経済の中心地である熊本にまず山内直丸とブラウンが赴き、今日の熊本におけるルーテル教会隆盛の基礎を築いた。ついで、一九〇一年（明治三四年）には米村常吉とウィンテルによって久留米伝道が本格的な緒につき、さらに和佐恒也による大牟田伝道が着手された。伝道者の数も教会の数も未だ僅かであったとはいえ、九州の主要都市への伝道熱はますます意気盛んに次なる伝道地を求めたのである。そのターゲットがほかならぬ福岡の地であったことは、むしろ当然というべきであろう。福岡は九州における政治経済そして教育文化の中心地として、あるいは大陸への要路として、その将来が大きく展望されていたからである。こうして一九〇六年(明治三九年)、山内量平が任を携びて佐賀から福岡に来たり、本格的な福岡伝道を開始することになる。

ところで、山内が福岡伝道を開始する以前の福岡のキリスト教は、どのような状況にあったのであろうか。

周知のように、福岡市は東の博多部と西の福岡部とに大別される。前者博多部は町人の町であり、後者福岡部は黒田五二万石の城下町である。かつて博多はキリシタン大名豊後の大友宗麟の勢力下にあり、数千のキリシタンがいたと伝えられているし、関ヶ原の合戦ののち筑前入りをした黒田長政はダミアンの教名をもち、その父シメオン黒田孝高（如水）は博多のキリシタンに手篤い保護を加えた。しかし、博多キリシタンの黄金時代も長くは続かず、慶長年

間の相続く徳川家康による禁教令、伴天連追放令により消滅し[71]、この地で再びキリスト教が語られるようになるのは明治に入ってからである。

明治期に福岡でカトリック教会の宣教が再開されたのは一八八七年（明治二〇年）であり、パリ外国宣教会のラゲ神父によってである。いわゆる『ラゲ訳聖書』で知られる神父である。しかし、当時福岡城内にあった福岡鎮台に長崎出身の信徒が数名いただけで、福岡の信徒は一人もいなかったという[72]。

福岡で最初に伝道を開始したプロテスタント教会は組合教会（現日本基督教団福岡警固教会）であり、熊本バンド出身の不破唯次郎の来福により始められている。一八七九年（明治一二年）のことである[73]。ついで、メソジスト教会（現日本基督教団福岡中部教会）がロングおよび谷川素雅により一八八四年（明治一七年）に伝道を開始、翌年同教会内に福岡英和女学校（現福岡女学院）が開設されている[74]。聖公会は一八八五年（明治一八年）、ハッチンソンの来福により教会を設立、アルパ教会（現日本基督教団福岡城東橋教会および聖公会福岡教会）と称した[75]。浸礼教会（現福岡バプテスト教会）は一八九二年（明治二五年）、若松からの出張伝道に始まり、一九〇一年（明治三四年）に教会を設立、今日の福岡市におけるバプテスト諸教会の中心となる[76]。日本基督教会（現日本基督教団福岡渡辺通教会および日本基督教会福岡城南教会）は一八九三年（明治二六年）に福岡伝道を開始、翌年、天神に会堂を建築している[77]。

たまたま『福音新報』に一九〇五年（明治三八年）の福岡におけるキリスト教界を概観した「福岡通信」が掲載されている[78]。当時を知る一つのよすがでもあり、引用しておこう。

> 九月以来連合祈祷会にて盛んに福岡博多の各教会信徒の一致を祈りしが、遂に十月十七日西公園に於て連合親睦運動会を開くこととなり、雨天にて運動は出来ざりしも有益なる会合なりき。其後天長節の連合祝賀会となり、連合の実稍上り居れり。浸礼教会にては礼拝に十数名の出席ある由。組合教会は西内牧師帰任後新なる英気を以て説

教せられ、礼拝には二十数名にて夜の説教会には三十名ばかりの出席者あり。アルパ教会にては朝の礼拝は五十名を上下し、夜は三十名位なり。メソディスト教会は隣家のミッション学校生徒出席するを以て来会者多し、他の信徒は二十名位なり。日本基督教会講義所は会員未だ少数にして朝夕の出席者は大抵十五、六名なり。九月以来三名の大学生転入し稍人数を増したり。安息日学校は殆んど信徒の子女にて十五、六名に過ぎず。福岡医科大学生間に基督教青年会設けられ、先月二六日小松フヰッシャの二幹事来援せられ其の発会式を上げたり。

博多ルーテル教会が創設される以前に福岡伝道を行なっていたのは以上の諸教会である。ここで注目しておきたいのは、カトリック、プロテスタントともにすべてが福岡部での伝道であり、キリシタン時代を除けば、博多部ではまったくなされていないことである。この意味では、博多ルーテル教会は博多部最初のプロテスタント教会といえる。東京深川教会時代に下町伝道の体験を有する山内量平が、やがて町人の町博多においてその庶民性と豊かな体験とを発揮することになるのである。

しかし、ルーテル教会の福岡伝道は山内のそれが最初ではない。まず久留米から米村とウィンテルが、ついで佐賀からピーリーそして山内が出張伝道を行なっているからである。[79]『路帖新報』第一号記載の「福音路帖久留米教会」欄に次のような記事がある。

福岡伝道　会員木内千葉太郎氏が福岡地方裁判所へ転任し、一族同地へ移転せられしを好機として、出張伝道を試み、先ず第一着手として、同氏宅に於て同地在留信徒並ニ求道者のために毎週木曜日夕八時より家族的集会を催し、且つ英語聖書研究会を開き、毎月第二、第四木曜日には佐賀よりピーリー博士出張せられ、其余はウヰンテル、米村両氏出張集会を司さどらる。毎回五、六名より十名内外の出席者ありて将来多望なり。

この一文はルーテル教会の福岡伝道に関する最も早い記録である。『雲の柱火の柱　日本福音ルーテル久留米教会宣教八〇年史』によると、木内千葉太郎は一九〇二年（明治三五年）三月一六日、ウィンテルより受洗、同年、福岡地方裁判所へ転任とある。[80] また、福岡伝道を報じた『路帖新報』第一号はこの年の六月二五日発行である。このことから、最初の福岡伝道は一九〇一年（明治三四年）説、[81] 一九〇三年（明治三六年）秋説[82]もあるが、正確な日付は特定できなくとも、一九〇二年の四、五月のことと推察される。なお、木内の福岡における住所は福岡部の大名町九三番地であり、いわゆる博多部ではない。いずれにしろ、福岡伝道は久留米、佐賀両教会による協同伝道であったと考えることはできよう。

しかしながら、その後の経緯は必ずしも明確ではない。『路帖新報』が「明治三六年の秋……ウ井ンテル米村の両氏始めて箔屋町某氏の店頭を以て仮講義所となし、時々出張して説教会を開かれたり。……翌三七年春説教所を上小山町白木伊之吉方に移されたり」と報じているにすぎない。[83] 再三にわたる移転の事情についても明らかにしえないが、おそらく、反キリスト教的悪感情のゆえにしめ出しを食ったものと思われる。

(二)、博多ルーテル教会の創設

久留米および佐賀両教会の協同による伝道活動が展開されていた福岡は、一九〇五年（明治三八年）秋から佐賀教会の専管伝道地となった。「この頃久留米教会は益々多忙となり、出張伝道の余暇なきこととなりし為、リッパード氏と協議」した結果である。[84] 資料的に確認することはできないが、久留米のウィンテルによるデンマーク系ミッションと、リッパードらによる南部一致教会ミッションとの間に、伝道地域をめぐっての協定が結ばれたのではないか、とも推測される。それはともかくとして、これを機に本格的な福岡伝道が開始されることになった。手はじめに山内が

一一月一日市外千代町に一家屋を借りて講義所を開設、毎週水、木の両日、各地の宣教師、牧師の応援を得ながら説教会を開いたのである。リッパードも隔週の木曜日に来福し、とくに青年学生の要望に応えて英語聖書研究会を開催している。[85]

山内が市外千代町に講義所を設置したのは、一九〇三年（明治三六年）、この千代町に福岡医科大学（現九州大学医学部）が創設され、佐賀教会員松永トシ子あるいは久留米教会求道者緒方フミ子らが付属病院看護婦として勤務していたために、彼女らの援助と協力を得て病院伝道とくに看護婦伝道に主眼をおいたからである、[86]という。「本教会（博多教会）は最初より病院伝道を以て目的としたる故、信者は看護婦たちのみなれば云々」との『路帖新報』の記事もみられる。[87]これらの記事が示唆するあり方は、まったく開拓伝道のすがたというべきである。とすれば、前項に述べたような数年前からの福岡伝道の成果とどのような連続性が存するのか、という疑問が生じる。この疑問に答える資料を現在のわれわれは持っていない。あるいは、前述の両ミッション間の協定にそれを解く鍵が存しているのかもしれない。

ともかく、福岡における教会創設の任を受けた山内は、佐賀からの出張ではなく、福岡での定住の必要性を痛感し、病院伝道に至便な福岡市博多部に教会、牧師館用の建物を探しはじめた。一九〇六年一月のことである。山内にとり伝道用の建物探しは、東京、佐賀そして博多と三度目であり、その困難さについては充分すぎるほど体験していた。案の定、博多においてもキリスト教に使用される家屋を貸す家主を見いだすことは容易ではなかった。苦労の末に見つけたのが、大浜町三丁目二五、六、七番地の家屋である。この家は「ケチ家」つまり〝曰く因縁〟のある文字どおり「ケチ」のついた家といわれていた。[88]隣家の足立醤油店では、すぐそばにこの空屋があったにもかかわらず、敬遠して別の場所に倉庫を借りていたという。相当に破損していたので、集会室と牧師住宅用に改装大修理を加えたが、何年か後の台風で牧師館の屋根が吹きとぶという椿事に見舞われている。[89]

山内は一九〇六年（明治三九年）二月三日、単身でこの大浜町の家屋に移転し、早速ここに「日本福音路帖博多教会」の看板を高くかかげ、福岡市におけるルーテル教会創設の橋頭堡を築いたのであった。そして、いよいよ次の日曜日、二月一一日にケチ家を改装した「新会堂」において、「最早の礼拝」が守られたのである。[90] 司会と説教は山内量平、列する者は山内幹枝および医科大学病院看護婦の梅崎ツタ子と十時まさ子であり、合計四名のささやかな礼拝であった。[91] この朝の礼拝の詳細は何一つ伝えられていないが、博多ルーテル教会はこの時、山内量平の手により誕生したのである。礼拝堂は日本間であったというから、出席者はおそらく正座していたであろう。ベンチ（椅子）が使用されるのは、一九〇九年（明治四二年）クリスマス以降である。[92]

この日、幹枝は山内に同行してはいるが、佐賀幼稚園のこともあり、しばらく佐賀に留まった。正式に福岡へ移転するのは四月も末になってのことである。佐賀教会では教会創設以来十数年にわたって、「熱心にまた懇切とを以って牧会の任に当られし山内量平氏は家族と共に愈々博多に移転せらるる事となりしは我らの実に惜別の情に堪へざる所なり。依て氏の牧会中の好意を謝し併せて氏の前途に神の聖手が優に置かれんことを祈らんため」に、四月二三日、リッパード宅において盛大な送別の会が開かれた。山内一家が佐賀を発った四月二九日は折悪しく激雨で道はまったくの悪路と化したにもかかわらず、見送る人は駅頭をうずめたという。[93]

他方、山内夫妻は過ぐる一八九三年（明治二六年）、シェラー、ピーリー両宣教師の突然の懇願を受けて、東都より遠路はるばる西国九州の佐賀に着任して以来一三年の間、伝道者としての喜びと艱難のすべてを経験し、教会形成の業に参画できた幸いを想起していたに相違ない。同時に、佐賀在任中に量平の母三千代、幹枝の母川瀬始代、そして姪の山内松枝といった肉親を次々と天に送り、市外本庄村の教会墓地に埋葬されていたこともあり、[94] 見送られて佐賀を離れる山内夫妻の胸中には多くのことが去来したことであろう。

㈢、草創期の博多教会

一九〇六年（明治三九年）二月一一日、博多教会の「最早の礼拝」が守られてより、伝道活動は順調というより快調そのものであった。この直後の三月、山内は『福音新報』に一文を寄せて次のように述べている。[95]「本年二月より（福岡市）大浜町三丁目二五番地に教会を設け其の隣家に引移りて伝道し居れり。目下信徒二名、求道者三戸六名の婦人、三名の学生にて、米国宣教師は時々出張して英語を教授し又説教しつつあり」と。還暦を前に円熟した豊かな経験の山内の牧会伝道と豪放磊落かつ庶民的な人柄、そして幹枝のとどまるところを知らない熱誠とこまやかな配慮は、とりわけ若い魂を引きつけずにはいなかった。それまでの看護婦を対象とした千代町講義所での伝道が結実し、次々と求道志願者（カテキーメン）が、そして受洗志願者があたえられている。

博多教会における最初の受洗者は、最早の礼拝出席者である梅崎ツタ子と十時まさ子をふくむ五名であり、六月一〇日リッパードが授洗している。もちろん、この五名はすべて大学病院看護婦である。[96]この日の聖餐式には一三名が陪餐している。この頃の聖日礼拝出席者は一〇名から二〇名を上下している。

山内幹枝の活動は、佐賀時代と同じく、日曜学校および婦人会の分野で大いに発揮されている。日曜学校教育は博多移転直後に開始され、分級や新しい教授法をとり入れて積極的に実施、早くも二つの分校までも開設されている。大浜町の本校では「大人部は毎日曜午前九時より開催、牧師の聖書講義あり。小児部は午後二時より、近来引続き市中に賑あり為に生徒減少せりと雖も、年齢に由て組を分つの必要を感じたるを以て従来の山内夫人及緒方嬢の外に梅崎つた子、大原ゑい子の二嬢に嘱托して教授することになりたれば、大いに行き届きて児童等は充分満足を表し居れり」という。さらに、本校のほかに月曜日に千代町分校、火曜日に馬出分校が開かれており、「山内夫人一人の担当にして讃美の教授及び画解き問答などすこぶる面白く教へらるるにより、生徒は毎会狭き説教所に充満し、カードを得て喜んで帰る状、やさしくも可愛らし」ともいう。[97]

この年の六月には「婦人会」の結成をみ、毎週水曜日に幹枝担当による聖書研究会が開かれている。[98] もっとも、婦人会と称されてはいるものの、その実態は看護婦を中心とした女子青年会であったと思われる。この婦人会では「山内夫人之を司どり馬太伝を講ぜらる。婦人たちも其下調べをなせる為、大いに興味を深くせりと喜び居らる」と。ところが「興味の増加するに従って毎週二回に改めたしとの希望せらるるものあるを以て……毎木曜日夜七時より大学病院内に開くこととし山内夫人担当して聖書の講義をなし居らる」ともいう。[99] 過労気味の幹枝は病を得て大学病院に入院するが、病院においても看護婦の協力を得て伝道に従事、その働きは止まるところを知らなかった。[100]

一〇月三一日は、ルターがかの『九五個条の論題』を提示した宗教改革を記念する日である。創立草々の博多教会初の宗教改革記念特別礼拝が、この日の午後三時より山内の司式で開かれた。「ルーテル博士の功績を追想し、其恩沢を感謝する」趣旨の山内の説教があり、会衆一同「ルーテル自作の讃美歌」をうたって礼拝を閉じた。その後「山内家の好意で茶菓の饗応をうけ、清談に時を過して散会」している。この特別礼拝に集える者男子六名女子一七名であった。[101] このような集会ののちに茶菓を供しながら、しばし清談(談笑)に時をすごすのは、山内の最も得意とするところであったと思われ、幾度となく催されている。また、このひと時はとりわけ若い人々にとり、山内夫妻の人格に親しく交わる絶好の機会を提供したことであろう。事実、山内家には食客、宿泊客が絶えなかったようである。各地の日曜学校、婦人会の聖書研究に加えて、のちにふれるように幼稚園勤務までしている幹枝の多忙さと労苦は察するに余りあるものがある。

博多教会最初のクリスマス祝会は一二月二六日に行なわれている。教会創設後僅か一〇カ月余しか経過していないにもかかわらず実に盛大で、讃美、唱歌、暗誦など三〇をこえるプログラム編成で、山内が和歌詠吟二首を披露しているのは興味深い。「子供と大人と合せて百名をこえる参会者であった」という。ここでも幹枝の大活躍振りがしのばれるのである。幸いにも、当時久留米教会員でのちに献身して、日田、門司などの牧師を歴任した落矢生こと松本学

明がこのクリスマス祝会に列席、その詳細を『路帖新報』に寄稿している。[102] 興味ある名文であり、博多教会にとっても一つの歴史的文書と考えられるので、その全文を『博多ルーテル教会八〇年史』に転載しておいた。[103]

この間、山内は聖日礼拝はもとより、祈祷会、求道者のための教理問答研究会、また、大浜町会堂のみでなく千代町、馬出の両説教所での伝道演説会を担当している。さらに、会計員を選出するなど、着々と教会内部の充実にも意を用いた。こうして、最初の一年（一九〇六年・明治三九年）のうちに、受洗者一七名（うち大学病院看護婦一六名）、転入者六名、求道志願式受領者二八名（うち看護婦二五名）を数えるにいたっている。このように、病院（看護婦）伝道を中軸に山内夫妻は博多ルーテル教会の基礎を築いていくのである。

㈣、充実と躍進

前項において、われわれは博多ルーテル教会創設当初にみられる山内量平、幹枝夫妻の活動を概観したのであるが、さらに進んで、明治末から大正初期にかけての博多教会の内外の充実と躍進のすがたを、山内夫妻に焦点をおきながら観察していこう。

まず、山内は博多着任直後に教会設立の願い出を県知事宛に提出し、およそ一年後の一九〇七年（明治四〇年）四月二七日付で当時の知事寺原長輝により設立認可をうけている。[104] 今日流にいえば宗教法人としての認証である。これにより、山内の宣教活動が「公的」に認められることとなったわけである。

福岡市内には、組合、日本基督、メソジスト、聖公会、浸礼といったプロテスタント諸教会がすでに存していたことを述べたが、早くもルーテル教会はこれら諸教会の仲間入りを果たし、山内は積極的に他教会との協調関係に貢献している。たとえば、一九〇七年（明治四〇年）の博福キリスト教連合による岡山孤児院支援の慈善会、あるいは各教会信徒大親睦会などに積極的に参加している。[105] 翌年には、同連合主催の大挙伝道集会をルーテル教会で開催、聖公

会、バプテスト教会の牧師が「弁士」となっている。[106] さらには、一九〇九年（明治四二年）一一月には同じく博福キリスト教連合によるプロテスタント伝道開始五〇年記念伝道説教会が、連夜市内各教会を巡回して開催され、山内は「十字架の意義」と題して聖公会アルパ教会で説教をし、ルーテル教会は最終日に会場となっている。[107] 市内連合祈祷会にも加入、しばしばその合場を提供し、山内が奨励者として奉仕したのはもちろんである。また、山内はこれら諸教会牧師との親しい交流を計っており、とりわけメソジスト教会牧師小坂啓之助とは幾度となく囲碁を楽しんでいる。[108]

同時に、地域社会への配慮も山内はおこたらなかった。たまたま一九〇八年（明治四一年）に一年おくれの還暦祝いをしているが、大浜町三丁目の隣人三〇軒をはじめとして合計六〇軒に祝賀の祝い物を贈り、町内の老人を招いて午餐を供している。この席で山内は「主の道をさえ述べしに（招待者は）何れも喜びて散会せられたり」という。[109] また、海岸に近い大浜町は博多でも有名な仏教行事の流れ灌頂、施餓鬼供養が営まれるところでもある。三丁目が当番のおりには山内もそれに参加、山内家に寄宿していた入江（のちの川瀬）徳太郎が町内の人々と同行して、喜捨を求めて郡部の村々を回っている。[110] その評価はともかくとして、地域社会の反キリスト教的感情を考慮して穏便な対応策を講じたものと察せられる。

他方、博多教会においてもその内部充実が計られ、外に向かってのいっそうの飛躍が試みられた。その第一は一九〇八年（明治四一年）、宣教師ミラーの来福である。還暦をむかえ、牧会者としてすでに円熟期から老境の域に達し、加えて健康にも幾許かの衰えをみせて入退院をくり返していた山内にとって、若冠二六歳のミラーの来援が大きな助けとなったことは多言を要しないであろう。山内は佐賀において十数年間宣教師と同労の経験をもち、宣教師とのチーム伝道の必要性とその要領とを充分に知っていた。ミラーは早速、山内を助けて日曜学校に英語組をもうけ、[111] とりわけ青年会の育成につとめた。その結実が一九〇九年（明治四二年）の博多ルーテル教会青年立茲会の結成である。[112]

この立茲会の中心人物入江徳太郎は、この年熊本に設立された路帖神学校に第一期生として入学するのである。さら

には、「間接伝道を目的とすることとて山内牧師も力を副へられた福岡実業学会」を開設、英語、漢文、数学、商業、簿記などが教授された。[113] おそらく、山内の佐賀における英語夜学校の体験に由来する設立であると思われる。英語はミラーが、漢文は山内が担当したのであろう。

博多教会は創設当初から伝道の教会で、すでに述べたように「病院伝道」をことのほか目指したのであった。山内自身が病気がちで入退院をくり返していたが、そのつど入院患者や看護婦に福音を宣べ伝えた。しかしながら、博多教会の伝道対象がただ病院のみに限定されていたわけでは決してない。むしろ、北部九州の伝道拠点として鐘崎、直方、折尾（八幡）へと伝道の触手をのばしていったのである。

一九〇九年（明治四二年）、山内はミラー、幹枝を伴い、すでに述べた入江徳太郎の郷里鐘崎を訪い、伝道の火蓋を切った。幹枝は子供たちを集めて得意の日曜学校風の集会をもち、山内とミラーは伝道説教会を開いた。次の日、一行は直方在住の会員小林まさの宅で同様の説教会をもった。[114] 小林は入江の姉であり、山内の司式により博多教会初の結婚式を挙げた人である。[115] これを契機に毎月二回直方と鐘崎伝道が続けられた。直方伝道の成果が今日の直方教会である。鐘崎には翌一九一〇年（明治四三年）八月に一カ月間山内が単身滞在して、鐘崎説教所の開設にまでこぎつけた。[116] たまたま、この鐘崎出身で佐賀盲学校に在職中の一青年が信仰を得、やがて神学校に進み、一九一五年（大正四年）卒業後直ちに鐘崎に赴任する。のちに盲人牧師としてユニークな貢献をした石松量蔵である。

山内が一カ月にわたり鐘崎に滞留して説教所を開設したことが、ほどなく折尾説教所の開設をも触発する。このことを知った博多教会の一会員岡部柾一が、彼の居住する折尾に説教所の開設を山内に請うたのである。鐘崎から帰宅後間もない山内は疲れを治す暇もなく、この申し出を快諾し、直ちに九月から一カ月間折尾に滞在して、新たに折尾説教所を設けるにいたる。[117] これが八幡教会の発端となるのである。今日とはおよそ異なる劣悪な交通事情のもとで、還暦をすぎ、しばしば病魔に襲われていた老山内の、この伝道への執念と熱意とをよび起こしかつ支えていたものは、

いったい何であったのであろうか。

山内量平の老軀を駆っての積極果敢な伝道活動とともに、幹枝のきわ立った活動も忘れることはできない。すでに述べたように、幹枝は日曜学校、婦人会、出張伝道その他表面には出ない数多くの働きを続けてきている。しかし、それらにもまして特筆すべきはキリスト教幼児教育への情熱であり、一九一三年（大正二年）に創立された博多ルーテル教会付属南博幼稚園は、まさにその結実といわなければならない。

幹枝が田辺時代から幼児教育に関心をもち、佐賀においてもリッパード夫人と相携えて幼児教育に専念したことはすでに述べた。博多移転後も婦人伝道師、牧師夫人としての激務のかたわら、求められて博多幼稚園に勤務した。山内は同幼稚園の顧問でもあった[118]。しかしながら、同園は私立（公立との説もある）であったが、キリスト教的教育の実施は遠慮せざるをえなかった。とはいえ、幹枝の教育方針はキリスト教主義を貫いていたために、「是は耶蘇の幼稚園」といわれることがしばしばであったという[119]。

このようなおりにミラーが博多教会に着任したのである。幹枝は好機到来とばかり、ミラーにキリスト教主義幼稚園設立の必要性を力説したのであった。「（幹枝が）該意見を吐きしも（ミラー）氏は容易に手を下さんとせざりしが懇求数度に及びし末明治四五年協議進んで其年より大乗寺前町八番地の家屋を借受けて諸般の準備に着手し翌年一月完成しかば南博幼稚園と命名して其の筋に請願し同年五月五日認可せられ」るにいたり、開園の運びとなる[120]。ともあれ、この幹枝の宿願がミラーを動かし、南博幼稚園の誕生に結果したのである。幹枝の熱意なしには、今日、七五年の歴史を有して「幼な子をキリストへ」導いている南博幼稚園は存在しえなかったであろう。

さて、山内が博多教会在任一一年余のうちで、最後のそして最大の事業は新会堂の建設というべきであろう。一九〇六年（明治三九年）、人から敬遠されていた「ケチ家」で礼拝をはじめて一〇年になろうとし、教会員の増加も著しければ、新会堂を望む声が次第に増幅されてくるのも当然のことである。すでに、一八〇八年（明治四一年）より教

会委員のなかに建堂委員を設置してその備えをしてきたとはいえ、[121]独力で会堂建設を遂行するのは余りにも大きな負担であった。これに大きな援助を与えたのはミラーであった。休暇で帰米したミラーは多額の建築資金をもたらしたのである。

土地はこれまた困難の末、博多部の中心地市小路に求められた。四〇〇年前の一五八七年（天正一五年）に戦火で荒廃に帰した博多を、豊臣秀吉が再興した際の町割りの中心地が市小路である。まさに、博多の中心部に教会が建つことになったわけである。この場所に位置する教会として、博多教会は「病院伝道の教会」から「博多町人救霊のための教会」へと、その使命を大きく展開させていくことになる。

一九一六年（大正五年）三月に着工した建物、坪数七三坪余の新会堂は八月に完成、九月二八日、第二〇回日本福音ルーテル教会年会会期中に捧堂式（献堂式）が盛大に挙行された。[122]この新会堂はイギリス風ハーフティンバースタイルの赤レンガ建築で、教会にはめずらしく立派な築山、池が前庭にあり、徳川時代に博多の豪商伊藤小左衛門が茶室用に築いた庭がそのまま利用された豪壮なものであった。この会堂は第二次大戦中に米軍の博多大空襲のおりに無惨にも破壊され、焼失してしまったのである。

五、エピローグ

新会堂建設の大事業を終え、大任を果たした山内量平、幹枝夫妻は、ようやくにして内容外観ともに基礎の固まった博多教会を辞任する決意をいだくようになる。佐賀より移転して以来、十有余年の博多における夫妻の伝道牧会は大きな成果をもって結実していた。しかしながら、ここ数年の山内はとくに持病のために入退院をくり返し、ミラーや山内直丸をはじめとする若い同労者の援助を受けることもしばしばであった。加えて、年齢もほどなく古稀をむか

えようとしており、引退の意志を堅くしたのも無理からぬことである。

幸いにも、後任牧師として青山彦太郎が決定、一九〇六年（大正五年）一一月一日に博多に着任したので、一一月五日をもって博多ルーテル教会牧師を退任することとなった[123]。山内の退任に際して、博多教会では山内夫妻の長年の労苦を慰め懇切な牧会を謝すべく、一一月一二日ミラー宅で謝恩慰労の一夕を催したのである[124]。

退任後もしばらく山内夫妻は博多に留まった。翌年三月一六日、離博を前にした山内夫妻は、教会関係者多数を招いて留別会を主催、集える者は信者未信者合わせて五〇余名であったという。翌一七日教会主催の送別会が開かれ、青山はじめ数名が惜別の情を吐露し、山内の答辞があって列席者一同去り難い思いのうちに散会した。この席で山内は数百首の和歌を披露し、祖父繁樹、父繁憲より伝えられた山内の深い教養に一同は感嘆の声をあげたという。三月二五日、山内は博多教会における最終の説教を行なっている[125]。しかし、残念なことにその説教題は判明しない。三月三〇日、山内夫妻は想い出深い博多をあとに大阪天王寺に向かった。駅のプラットホームには見送る人々があふれ、山内夫妻との最後の別れを惜しんだのである[126]。

大阪に向かった山内夫妻は桃谷に仮寓を得て「日本福音ルーテル大阪教会」とし、早速伝道にとりかかった。今日の大阪教会のスタートである。山内の健康は必ずしもすぐれず、一時は危篤状態にすら陥ったこともある[127]。しかし、幹枝は日曜学校を開始し、婦人会を組織、博多時代に劣らない活動ぶりであった[128]。『るうてる』一九一八年（大正七年）五月号によれば、「桃谷の教会は山内牧師の病中にも拘らず教勢振興せり。夫人の活動効果著るしきものあり。礼拝説教は主としてヘプナー師担当せられ、目下求道中の男女数名を有す。婦人会は毎月第二木曜に開きおれるが、大抵十八名位の来会者あり。教話は山内夫人が努められ頗る有望なり」とある[129]。しかし、六月号には「大阪の山内牧師は又々病に患ひ、只管静養の由」と山内の健康が相変わらずすぐれないことを伝えている[130]。ところが、七月号は「山内牧師着任以来日尚浅きも教会創設の劇務は老師の宿癖を一層重からしむるに至れば、愈々七月限り現職を辞し郷里紀州田

辺に隠退の上病躯を静養せらるる事となり七月二日を卜し和歌浦より汽船に便乗せらる」と山内の引退と田辺への帰郷を報じている。[131]

この年一九一八年（大正七年）一一月一一日の夜、三〇有余年前にキリスト者として新生を体験した田辺の地において、山内量平は七〇歳で、その一カ月余り後の一二月二四日幹枝は五五歳で、それぞれ天に在す父なる神の召しに応えて、波瀾に富んだ伝道と牧会の生涯を閉じたのである。

まことに残念なことであるが、山内夫妻召天前後に関する詳細を知ることはできない。『田辺基督教会教会日誌』は、なぜか一九一八年度分（大正七年）が欠落しているからである。『福音新報』は「山内量平氏（十一月）十一日夜田辺に於て死去」と報じ、おそらく植村正久の筆と思われる山内の略歴を掲載しているにすぎない。[132] 山内夫妻の墓は田辺市の基督信徒共同墓地（現日本基督教団田辺教会墓地）のほぼ中央部に建てられている。

山内夫妻召天の報に接した博多教会では、一九一九年（大正八年）一月五日の礼拝において、追悼の会が値賀虎之助司式のもとに開かれた。博多教会の開拓者として、会堂建設までの主管牧師として、また南博幼稚園の設立者としての大いなる働きに感謝を捧げ、博多にありし日の夫妻に想いをはせたのであった。[133] たまたま、日本福音ルーテル教会第二三回年会がこの年の三月に博多教会で開催された。この機会にも山内夫妻の追悼会が盛大にもたれたのであった。[134]

山内夫妻召天後およそ四〇年を経た一九五七年（昭和三二年）の二月二五日、田辺教会墓地で一つの儀式が行なわれた。「山内量平先生建碑式」である。日本福音ルーテル教会がその初代邦人牧師であり、佐賀、博多そして大阪におけるルーテル教会創設の労苦を一身に担った山内の業績を讃える記念碑を建てたのである。[135] この記念碑は今日も山内夫妻の墓の左側に在り、次の碑文を読むことができる。

主ニ在リテ終末ノ日ノ復活ヲ待チツツアル故牧師山内量平氏ハ本教会が明治二六年（一千八百九十三年）四月佐賀市ニ宣教ヲ開始セル際ノ最初ノ日本人教職デアッテ佐賀博多大阪ニ教会ノ創始ニ当ラレタ誌シテ記念トスル

昭和三十一年四月二日

日本福音ルーテル教会建之

〈注〉

1　この書簡は米国南部一致ルーテル教会機関紙『ルセラン・ヴィジター（The Lutheran Visitor）』（一八九三年一月二六日号）に掲載されている。なお、『ルセラン・ヴィジター』（以下本稿ではＬＶと略す）は一九八八年秋に、日本ルーテル神学大学徳善義和教授がシカゴ・ルーテル神学校でコピーして持ち帰られた。筆者は同教授のご好意で、一八九九年度分までを閲覧させていただいた。同紙は日本福音ルーテル教会の初期資料として不可欠なものである。ただし、徳善教授によると一九〇〇年度以降のものは散逸してしまっているとのことである。

2　シェラーは大阪で「一致教会の大会（the Synod of the United Church）のいくつかの部会」に出席した旨記しているが、一致教会（日本基督教会）大会は一二月二日より八日まで開催されている（山本秀煌著『日本基督教会史』日本基督教会事務所、一九二九年、復刻版一九七三年）二一七頁。

3　『佐賀新聞』（一八八八年九月一八日）。

4　『佐賀新聞』（一八八九年五月二六日）。

5　しかし、実際にはブラッドバリー宅は市の郊外に位置していたために、シェラーはより安価で、住宅、学校、教会等々の多目的に使用可能な家屋を他に見いだしている。その家屋が、おそらく「南堀端の元多久屋敷」（『佐賀新聞』一八九三年二月五日）を指すと思われる。

6　佐賀カトリック教会編『佐賀カトリック教会史』（佐賀カトリック教会、一九八四年）二一頁以下。

7　九州教区歴史編集委員会編『聖公会九州教区史』（日本聖公会九州教区、一九八〇年）二八―二九頁、三九頁。

8　日本基督教団佐賀教会編『創立百周年記念佐賀教会史』（日本基督教団佐賀教会、一九八〇年）六―九頁。G・F・フルベッキ著、五十嵐喜和訳『日本プロテスタント伝道史、下』（『日本基督教会歴史資料集』八、日本基督教会歴史編纂委員会、一九八五年）六六頁、八八頁。

9　『佐賀カトリック教会史』によると、カトリック教会の佐賀伝道は一八八九年（明治二二年）からで、佐賀市中ノ小路の現在地を購入して仮会堂を建てたのが一八九四年（明治二七年）である（二一頁）。したがって、シェラーが記す、放棄された「最も便利な場所にあった説教所」がどこであるのか不明である。しかし、この仮会堂は建築直後不幸にして焼失、その後しばらくの間、松原町明治橋通に移転したという（二一―二二頁）。一八九三年（明治二六年）にルーテル教会が、この通りに仮会堂を設置したことから、さほど長くもない同じ通りにルーテル教会とカトリック教会が軒を並べていたことになる。

10　この点については、LV（一八九三年二月一六日号）にも再びふれられている。

11　LV（一八九三年一月二六日号）。

12　LV（一八九七年七月一五日号）。

13　LV（一八九三年一月二六日号）。

14　LV（一八九三年五月一一日号）。

15　LV（一八九七年七月一五日号）。

16 LV（一八九三年五月一一日号）。
17 『佐賀新聞』（一八九三年一月二一日および二月一日）。
18 『佐賀新聞』（一八九三年二月五日）。シェラーが佐賀を前年末に訪れたおりに、かつてブラッドバリーが住んでいた家屋に魅力を感じ、「それは二階建ての日本家屋で、多くの大きい部屋を有している。彼の管理に感謝したいのだが、外国人の居住にまったく快適となっている。私はこの家がわれわれの将来の必要性にどのようにうまく合致するか判らないが、これらの部屋を教会学校（parochial school）として用いたいと願っている」と述べている（LV、一八九三年二月一六日号）。ただし、ここに記されている家屋が「南堀端の元多久屋敷」を指すとは考えられない（注5参照）。
19 日本福音路帖教会創立貳拾年記念会編『日本福音路帖教会史』（日本福音路帖教会、一九一四年）一二頁。
20 『路帖新報』第一九号（一九〇三年三月二五日）。ただし、ピーリーが記すところによれば、ピーリー、山内の佐賀到着は三月一三日となっている（ピーリー著、青山四郎訳『日本伝道開始の記録』グロリヤ出版、一九八二年）一六頁。
21 LV（一八九七年七月一五日号）。
22 『日本福音路帖教会史』二〇頁。
23 『日本福音路帖教会史』二〇頁、ピーリー、前掲書、一六―一七頁。
24 “Church of the Cross”（LV、一八九三年五月一一日号）。
25 佐賀近代史研究会編『佐賀近代史年表明治編、上』（佐賀新聞社、一九八八年）三七六頁。
26 LV（一八九三年一一月三〇日号）。
27 LV（一八九四年三月一日号）。
28 ピーリー、前掲書、一七頁。『日本福音路帖教会史』にも、次のようにこの日の有様が記されている。「其の日の司会者は、勿論山内氏であった。おなじ市内の西部の教会、即ち日本基督教会の信者達が深切（ママ）にも応援の為参集したので、漸く会堂の寂寥を感ぜざることが出来た。実は通行人の為に、道路に向って開かれたが、僅か二十人足らずの見物人が、足を

止めたに過ぎない。讃美歌や祈祷は観客には全然不可解のものである。礼拝式も説教も、静に、豊に、旦厳に施行せられて、かくして誕生の一日は芽出度く終った。シーラー、ピーリー、山内夫妻の四人は、云ひ難き感謝の念に打たれて、心は唯喜悦と希望を以て満たされたのである」（二一頁）と。しかし、山内幹枝は、この日佐賀にはまだ到着していない。

29 ピーリー、前掲書、一七頁、四〇頁。『日本福音路帖教会史』二四頁。

30 LV（一八九三年一一月三〇日号）。ピーリー、前掲書、七一頁。

31 LV（一八九三年五月一一日号）。

32 『佐賀新聞』（一八八五年一二月一五日）。

33 『佐賀新聞』（一八八九年一〇月二日、一八九〇年二月九日、一〇月九日など）。

34 ピーリー、前掲書、一八頁。

35 LV（一八九三年一一月三〇日号）

36 ピーリー、前掲書、四一頁。

37 LV（一八九三年一一月三〇日号）。

38 ピーリー、前掲書、四一頁。LV（一八九四年三月一日号、一八九七年七月二二日号）。ピーリーは『公同礼拝式と諸儀式用式文』（Common Service and Order for Ministrial Acts）の翻訳に鋭意努力を重ね、一八九四年三月四日付書簡で『公同礼拝式』の完成が間近いことを示唆している（LV、一八九四年五月一〇日号）。なお、翻訳協力者として「日本人学者」（Japanese scholar）とのみ記されている（LV、一八九七年七月二二日号）が、誰であるかは不明である。ただし、一八九七年六月四日発行の『礼拝式』の奥付に「合訳　アール、ビー、ピーリー。大塚義信」とあることから、この「日本人学者」が大塚義信である可能性は高い。

39 LV（一八九四年三月一日号）。

40 LV（一八九五年六月六日号）にシェラーは「第二のヘルパーと彼の経歴」（A Second Helper and His History）と

題して鈴木直丸を紹介している。

41 『日本福音路帖教会史』二九―三〇頁。

42 LV（一八九六年四月二三日号）。

43 LV（一八九七年七月二二日号）。ピーリー、前掲書、四八頁、『日本福音路帖教会史』三二頁。『佐賀新聞』は一八九六年（明治二九年）九月二七日、シェラーが病気を理由に解雇されたことを伝えている。

44 ピーリー、前掲書、四七―四九頁。『日本福音路帖教会史』三一頁。

45 LV（一八九九年二月二日号）。ピーリー、前掲書、五〇頁。

46 福山猛編『日本福音ルーテル教会史』（ルーテル社、一九五四年）四〇頁。

47 LV（一八九九年三月九日号）。

48 多くの記録は、この両山内按手礼受領の日を六月二九日としている（ピーリー『日本伝道開始の記録』五一頁、『日本福音ルーテル教会史』四六頁など）。しかしながら、『佐賀ルーテル教会教籍簿』には山内自筆で「廿二年一月廿九日按手礼ヲ受ケ本牧師トナル」と記されている。ここに引用したブラウン書簡も二月三日付（LV、一八九九年三月九日号）であり、一月二九日が正しいと思われる。この過誤はJan.（一月）をJun.（六月）との読み違えまたは誤植の結果であろうか。

49 LV（一八九九年三月九日号）。

50 LV（一八九九年五月一八日号）。

51 『日本福音路帖教会史』三三頁。

52 LV（一八九九年二月二日号）。

53 LV（一八九九年五月四日号）。

54 『日本福音ルーテル教会史』五四頁。

55 『日本福音ルーテル教会史』五〇―五一頁、六六―六七頁。
56 『路帖新報』第一号、第二号（一九〇二年六月二五日、七月一〇日）。
57 『路帖新報』第四号（一九〇二年八月一〇日）。
58 ピーリー、前掲書、九一頁。
59 LV（一八九五年一月三一日号）。
60 LV（一八九九年五月四日号）。
61 ピーリー、前掲書、九一―九三頁。
62 LV（一八九九年五月四日号）。
63 拙稿「山内量平評伝」（『日本福音ルーテル教会百年史論集』第二号、日本福音ルーテル教会、一九八九年）四一―四二頁。
64 『るうてる』第三八号（一九一四年六月一五日）に「此地（佐賀）も迫害多く教徒の子女の迷惑思ひやられたる故に明治廿六年の頃独力幼稚園を設立せんとせしも種々なる困難ありて意を果さざりしが遂に意を決して明治三十二年一小屋を佐賀市水ヶ江裏町へ造り姪松枝を助手として将に開園の運に至りしも不幸にして再び頓挫を来たしぬ」とある。
65 『路帖新報』第七号（一九〇二年九月二五日）。
66 『路帖新報』第九号（一九〇二年一〇月二五日）。
67 『路帖新報』第一一号（一九〇二年一一月二五日）。
68 「設立認可證」（佐賀幼稚園蔵）。
69 『路帖新報』第二一号（一九〇三年四月二五日）。
70 『路帖新報』第一八号（一九〇三年三月一〇日）。
71 博多キリシタンについては、たとえばフロイス『日本史』（松田毅一・川崎桃太訳、中央公論社、一九八〇年。柳谷武

夫、平凡社、一九六三年）、あるいはイエズス会関係文書などに散見される。まとまった論考としては、現在のところ、チースリク「慶長年間における博多のキリシタン」（『キリシタン研究』第一九輯、吉川弘文館、一九七九年）をみるのみである。

72 大名町教会史編集委員会編『大名町教会百年史』（大名町カトリック教会、一九八六年）四五―四九頁。

73 上原三郎・山中均之編『福岡警固教会八十年』（日本基督教団福岡警固教会、一九六五年）一―三頁。なお、同教会では会員近沢敬一に託して百年史を編纂中である。

74 日本基督教団福岡中部教会百年史編集委員会編『日本基督教団福岡中部教会百年史』（日本基督教団福岡中部教会、一九八五年）九頁以下。

75 日本聖公会福岡教会百年史委員会編『日本聖公会福岡教会百年史』（日本聖公会福岡教会、一九八九年）七頁。『福岡城東橋教会八十年を顧みる』（日本基督教団福岡城東橋教会、一九七〇年）二頁。

76 日本バプテスト連盟歴史編纂委員会編『日本バプテスト連盟史』（日本バプテスト連盟、一九五九年）六三頁以下。関谷定夫「福岡地区バプテスト教会略史」（『西南学院大学神学部報』第二六号、西南学院大学神学部、一九八八年）、四頁。

77 帆足主基夫編著『日本基督教会福岡城南教会史』（福岡城南教会史編纂委員会、一九七三年）八四頁。

78 『福音新報』第一一巻五四四号（一九〇五年一一月三〇日）。

79 『路帖新報』第一号（一九〇二年六月二五日）。

80 久留米教会史編纂委員会編『雲の柱・火の柱　日本福音ルーテル久留米教会宣教八〇年史』（日本福音ルーテル久留米教会、一九八一年）三四頁。

81 『福音新報』第一一巻五六〇号（一九〇六年三月二二日）に「卅四年始めて講義所を設立してウ井ンテル氏リッパアルド氏交々伝道し、山内氏も時々出張せられたり」（傍点筆者）とある。

82 『路帖新報』第一号（一九〇六年八月一日）には、「明治三六年の秋なりし。久留米教会の教師ウ井ンテル米村の両氏始

めて箔屋町某氏の店頭を以て仮講義所となし、時々出張して説教会を開かれたり」（傍点筆者）とある。

83 『路帖新報』第一号。

84 『日本福音路帖教会史』八九頁。

85 『路帖新報』第一号。

86 『日本福音路帖教会史』八九頁。

87 『路帖新報』第一二号（一九〇七年六月一日）。ところが、博多ルーテル教会には教会創設の目的を「博多町人の救霊」とする伝承が強く存している。「博多町人の救霊が山内牧師の願いであった」（『九州における伝道の歩み』九州教区九十年史編集委員会、一九八六年、一二二頁）あるいは「山内牧師が初代牧師に就任、博多町人の救霊に専心する」（『福岡県百科事典』下、西日本新聞社、一九八二年、三八三頁）などである。のちには、たしかにこの目的へと変化していくことは否定できないが、創設当初は看護婦を主体とした病院伝道を目的としている。また、山内の博多着任は、博多で「伴天連追放令」を出すなどした豊臣秀吉を、博多再興の大恩人と祀る太閤神社に額ずく人々の町にキリスト教を伝えようとした、ともいう（山内六郎「日本福音ルーテル博多教会三十年史」『博多ルーテル教会報』一九三五年）。しかしながら、これらの説を支持する資料は現在のところ見いだせない。

88 かつて大浜町三丁目に居住していたという石橋勝蔵氏による。

89 『るうてる』第四一号（一九一四年九月一五日）。

90 『路帖新報』第一号。

91 『山内メモ』（博多ルーテル教会蔵）に「山内量平ハ明治卅九年二月三日博多ニ移転同四日日曜同十一日最早ノ礼拝量平幹枝梅崎十時メ四人」とある。

92 『入江徳太郎日記』（一九〇九年一二月二三日）（杉崎家蔵）。

93 『路帖新報』第一号、なお、私事にわたって恐縮であるが、この送別会の席上、筆者の祖父が聖書朗読を担当している。

94 山内量平は「川瀬始代告別式式辞草稿」の中で、「此三氏が遂に佐賀福音路帖教会の信仰の人柱となりて、枕を本庄村の信徒共同墓地ならん」と述べている。

95 『福音新報』第一一巻五六〇号（一九〇六年三月二二日）。

96 『路帖新報』第一号（一九〇六年八月一日）。

97 『路帖新報』第四号（一九〇六年一一月一日）。

98 『路帖新報』第一号。

99 『路帖新報』第二号（一九〇六年九月一日）、第三号（一九〇六年一〇月一日）、第四号（一九〇六年一一月一日）。

100 『日本福音路帖教会史』九〇頁。

101 『路帖新報』第五号（一九〇六年一二月一日）。

102 『路帖新報』第七号（一九〇七年一月一五日）。

103 拙稿『博多ルーテル教会八〇年史』（日本福音ルーテル博多教会、一九八九年）五二―五五頁。

104 『路帖新報』第一二号（一九〇七年六月一日）。

105 『路帖新報』第一〇号（一九〇七年四月一日）。

106 『路帖新報』第二六号（一九〇八年八月一日）。

107 『路帖新報』第四二号（一九〇九年一二月一日）。

108 『入江徳太郎日記』

109 『路帖新報』第二四号（一九〇八年六月一日）。

110 『入江徳太郎日記』

111 『路帖新報』第三〇号（一九〇八年一二月一日）。

112 『入江徳太郎日記』（一九〇九年一月一三日）。

113 『路帖新報』第四二号（一九〇九年一二月一日）。
114 『路帖新報』第三六号（一九〇九年六月一日）。
115 『路帖新報』第三三号（一九〇九年三月一日）。
116 『路帖新報』第五一号（一九一〇年九月一日）。
117 この岡部柾一による「福音路帖折尾説教所設置発表」と題する一文（『路帖新報』第五三号、一九一〇年一一月一日）も、『博多ルーテル教会八〇年史』に転載しておいた（六〇頁）。
118 『路帖新報』第三五号（一九〇九年五月一日）。
119 『路帖新報』第三六号。
120 『るうてる』第三八号（一九一四年六月一五日）。
121 『路帖新報』第一九号（一九〇八年一月一日）。
122 『るうてる』第六六号（一九一六年一〇月一五日）。
123 『るうてる』第六八号（一九一六年一二月一五日）。
124 『るうてる』第六九号（一九一七年一月一五日）。
125 『るうてる』第七二号（一九一七年四月一五日）。
126 『るうてる』第七三号（一九一七年五月一五日）。
127 『るうてる』第八一号（一九一八年一月一五日）、第八二号（一九一八年二月一五日）。
128 『るうてる』第八二号。
129 『るうてる』第八五号（一九一八年五月一五日）。
130 『るうてる』第八六号（一九一八年六月一五日）。
131 『るうてる』第八七号（一九一八年七月一五日）。

132 『福音新報』第二四巻、一二二〇号（一九一八年一一月一四日）、一二二一号（一九一八年一一月二一日）。

133 『るうてる』第九四号（一九一九年二月一五日）。

134 『るうてる』第九六号（一九一九年四月一五日）。

135 『るうてる』第一〇八号（一九五七年三月一五日）。なお、筆者は一九八六年九月に田辺市にある山内量平先生夫妻の墓に詣でた。

〈座談会〉

教会建築の歴史と現代　（その二）

出席者　徳善　義和（日本ルーテル神学大学教授／司会）
江口　再起（藤が丘教会牧師）
河野　通祐（建築家・武蔵野教会会員）
菅野　義隆（建築家・大岡山教会会員）
西村　晴道（建築家・ひかり教会会員）

徳善　前回の皆さんに、再度、集まっていただき、教会建築をめぐる二回目の座談会を開くこととしました。前回は、日本のルーテル教会の教会建築一〇〇年の歩みを振り返りながら話をすすめましたが、その中から二つの課題が出てきました。一つは教会建築とは何か、わけてもルター派としての礼拝観・教会観から見て教会建築はいかにあるべきかという問題、もう一つは、日本のルーテル教会としての現実的、具体的な教会建築の指針書（原則的なテーゼ）が作れないだろうかという問題です。そこで今回は、その二点をふまえながら、教会建築の今後をも考えに入れて話し合っていただけたらと思います。

●ルター派と教会建築

河野　ルター神学と教会建築ということを考えるとき、さしあたり二つの点が指摘できるのではないでしょうか。一つは教会堂の大きさの問題です。ルーテル教会の礼拝は、やはり説教を軸としますから、あまり大きくないほうがよい。それで、説教に集中できる適正な規模というものがあるはずです。第二点として、ルターは教会を「信徒の集まり」と把えたわけですから、教会建築を考える際にも、その信徒性、民衆性、つまり地域性の問題が大事だと思います。その地域の生活の中で教会堂が組み立てられていかねばなりません。別の言葉で土着性と言ってもよいのですが、しかしそれは、たとえば奈良にある、ある教団の寺院風な建造物ということではなく、また、たんに日本風というようなことでもなく、信徒性というところから出てくる地域性・土着性です。それから、教会建築の基準となる指針を作る場合、用語や概念をはっきりさせておくことも大切ですね。たとえば「教会」という言葉は

信仰者の集まりであって、やはり建造物としての「教会堂」とは区別して用いたほうがよいなど……。

徳善　そうですね。カトリックでは教会とは、教会法に従えば建物、聖別された建物、そこに聖体が保存されている建物なんですが、プロテスタントの場合、教会は「聖徒の交わり」ですから、たんに建造物ではない。ですから用語の上でも教会と教会堂は区別したほうがよいでしょうね。

西村　何か教会建築に関する神学的な基準書といったものはあるのですか。

徳善　ドイツで戦後につくられた文献がいくつかありますね。[1] アメリカにはたぶんないでしょう。

西村　ソビック博士は、教会建築に関して、アメリカではカトリックは統一的にやっているが、ルーテル教会では個々にまかせられていると言っていました。ルーテル教会の場合、あまりいろいろと基準を決めないほうがよいということでしょうか。

徳善　いや、どこまで決めておくかが問題です。全く自由勝手というわけにはいかないでしょう。ルター神学の伝統は、はっきりあるわけですから。

西村　つまり教会建築を考える場合、言葉（神学・理念）としては出せるが、形としては出せない。形をつくるのは建築家の仕事だと……。

河野　まさに建築家として形をどう出せるかが問題ですね。しかし、だからこそ、その形の奥にある理念が大切となる。建築家の白井晟一氏と話したとき、彼は建築は建築主に責任を負うのではなく、絶対（神）に対して責任を負うと言っていました。ところが日本ルーテル神学大学を設計した村野藤吾氏は、資本に対して責任を負うと言っています。彼の専門はもともと商業建築ですからね。そこで私が、いや、神への責任ではないかと言ったら、村野氏は、そう、資本への責任ということも、神への責任に含まれると言っていました。そこで、教会建築を考える際にはますます理念（神学）が大事になってくると思うのです。

江口　ルーテル教会で教会建築論があまりはっきりした形で出てこなかったのには、やはり歴史的な背景がありますね。ルターが宗教改革運動を進めた時、もともとあったカトリックの会堂をそのまま使用したのですから、そもそも会堂を建てるという発想がない。次に、キリスト教がヨーロッパからアメリカに入っていった時、会堂を建てるという思想が出てきました。しかもアメリカの建国の理念はデモクラシーですから、何ほどか、その理念に染めあげられたルーテル教会の会堂が建築されていったのではないでしょうか。そうしたわ

けで、日本のルーテル教会は、神学はドイツから、教会制度や教会建築はアメリカから影響を受けざるをえなかったのです。日本でルーテル教会の教会建築論が今に至るまで場所をもっていなかったのは、この両者のズレがあるからでしょうね。

河野　ということは、ルターはカトリックの教会建築のすべてを否定したわけではないということですね。

徳善　そうです。ただ宗教改革の陣営が、以前からあったカトリックの会堂をそのまま使った中で、目立って新しくなったのは説教台でした。つまり、神の言葉の説教の重要性がきわ立ったということでしょう。ルターが存命中に建築された教会堂は、トルガウの会堂ただ一つですが、その献堂式説教をルターがしているので、その説教や手紙を調べてみると、もっと多くのことがわかるかもしれません。

●聖なる感覚？

河野　ところで、教会堂を考える場合でも、たんに建物だけを考えるのでなく、全体の環境というか、雰囲気が大事ですね。環境によって、神秘性も民衆性も出てくるので……。

徳善　その神秘性と民衆性ですが、それが前回から問題になっている「聖なる空間」と「交わりの空間」の問題ですね。前回、前田氏は、教会は「聖なる空間」であるという点を強調し、それに対して私は、教会は「神の民の集まる家」という言い方をしました。しかし前田氏が言われたことは、中世の教会が建造物として聖なる空間として造られたにもかかわらず、その聖性を喪失していった。それは、そこで神の言葉が働かなくなったからで、そこに神の言葉の回復としての宗教改革が起こった。したがって宗教改革こそ「聖なる空間」の復興ではないか、ということでした。その考え方は、私の「神の民の集まる家」という言い方と一致すると思います。つまり、神の言葉が人々を集め、その神の民の集まった場所で、神の働き（言葉）が出来事となる空間（家）、それが教会だと私は考えているからです。要するに、「聖なる空間」と「神の民の家」の理念は結びつくと思うのです。

西村　私は以前は、教会というと集まり＝共同体という側面のことばかりが頭にあり、コミュニティ的なもの（交わり）プラス礼拝が教会であるというふうに考えていました。しかしヨーロッパの教会などを見学していると、なんというか、圧倒的な、ゴシック的な聖なる空間というのが前面に出ていて考えさせられました。けれども、会堂を建てるとき会員のかたがたと相談していると、今でも皆さんは、明るく暖かい交わりをイメージできる教会か、あるいは静かで瞑想的な聖

なる礼拝空間の教会か、この両者の間で揺れているように思うのです。ルーテル教会の場合、どちらでしょうか。献堂式のとき、礼拝堂を聖別すると言いますね。あれはどう考えたらよいのでしょうか。

江口　礼拝堂だけでなく、聖卓、洗礼盤、説教台も聖別します。それはルーテル教会の式文に出てきますね。そこで、その聖別の意味ですが、確かにプロテスタントでは、教会は「会衆の集まり」だとされています。しかし問題は、それがどういう集まりであるかということです。それは単なる人間集団ではない。礼拝する群れです。したがって礼拝において確かに人々が集まっているけれども、そこにいるのは人だけではない。「見えざる神」がおられる。そしてその神が「神の言葉」として、つまり説教とサクラメントの出来事として現臨される。その生起（現臨）の場として説教台や聖卓、洗礼盤があるのですから、それを象徴的な意味をこめて聖なるものとして他と区別する、すなわち聖別すると言えるのではないでしょうか。

西村　その場合、説教台、聖卓、洗礼盤の置いてある、いわゆる内陣（チャンセル）（聖壇部分）だけが神聖なのでしょうか。キリストが十字架にかかられた時、神殿の幕が二つに裂けたと聖書に出てきますが、これはもう礼拝堂において内陣と外陣の区別がなくなったということではないでしょうか。ソビック博士もそう言っていました。

河野　しかし実際の感覚として、バザーのとき、場所が足りなければ礼拝堂も使うのでしょう。しかしそれでも、いわゆる聖壇部分（内陣）の上でだけはバザーをしてほしくない……。

江口　「聖」ということですが、カトリックの場合、聖とは聖なるモノなのです。礼拝堂や聖卓というモノそのもの、場所それ自体が神聖なのです。それに対してプロテスタントが聖という時、そのモノそのものが、モノとして神聖だということでなく、そのモノ、その場所で起こる神の働きゆえに、そのモノ、その場所を象徴的に聖なるものとして区別する。

西村　しかし、そうであれば、説教台、聖卓、洗礼盤といった内陣部分のみを特に聖別するのでなく、ソビック博士も言うように、もはや内陣と外陣の区別をとり払って、礼拝堂全体が内陣であり、礼拝堂全体が聖なる場所ではないでしょうか。

徳善　確かに、昔のように内陣は神聖な場所で聖職者しか立ち入ることができなかった、といったような区別はもはや成り立たないでしょう。しかし、内陣はその場でみ言葉の出来事が起こる場所です。その意味で、やはりその場に臨む緊張

感が生じるはずです。そしてそれは聖ということと無関係ではないのではないでしょうか。

●ソビックの教会建築論

菅野　私はソビック博士の小冊子『神の民の家』[2]を読んでみましたが、たいへん教えられました。中でも特に、教会堂が神と民とが一体となる空間であるという考えに感銘を受けました。つまり、いわば神のおられる場所と人々が礼拝する場所が一体化しているような礼拝堂です。もちろん、一体化していると言っても、礼拝そのものには日常性を離れた緊張が不可欠ですから、教会堂が人々の交わりのみの場となっては困ります。面積が十分あれば、礼拝空間と交わりの空間を別々に二つ用意することもできますが、都会の場合、それもなかなかむずかしい。

江口　神と人とが一つになる空間という考えに異存はありませんが、その場合、あくまでも人々（会衆）の真っ只中におられる神の中心性が常に意識されている必要があると思います。神と人とが一つということで、われわれはついつい結局は人間中心の空間を考えてしまいがちですから。

菅野　礼拝における神と人との一体性を象徴的に表現するために、具体的にたとえば、礼拝の始まりのときに牧師は内陣の奥の特別の部屋からでなく、会衆席の側から前のほうへ入っていくとか、聖餐式のブドウ酒もはじめから聖卓の上にあるのでなく、礼拝の只中で持って行くとかが考えられないでしょうか。

江口　なるほど、いろいろな工夫はありえますね。しかし、そうしたソビック流の考え方は、色濃くアメリカ・デモクラシーの流れの上にあるように感じます。もちろん、神中心、神の言葉中心と言っても、より正確に言えば「受肉した神の言葉」の中心性ということですから、神の言葉も決して抽象的なものではなく、まさに人々の中に入って行き、受肉していかなければ、礼拝にはなりません。そして、このことを踏まえた上で、やはりアメリカ社会の中の教会とはちがう、日本人なりの神と人との関係のつけ方、すなわち聖性の感覚があるのではないでしょうか。

●聖卓・説教台・洗礼盤

徳善　ところで、今まで話し合ってきたことをふまえて、日本のルーテル教会の教会建築のための指針を書くとすれば、どうなるでしょうか。少し具体的に検討してみましょう。

西村　私がソビック建築事務所で学んだとき、まず聖卓、説教台、洗礼盤が第一に考えられねばならないと教えられまし

た。次に聖書朗読台やオルガンの位置、会衆席の問題、それから日本では特に（仮）納骨室の問題。それからソビック博士がキリストの実存のサインと呼んでいた十字架、光、ドア。さらに母子室やコンコース・ロビー、また音響の問題などがありますね。

徳善　まずオルターですが、以前は正面の壁につけて祭壇（聖壇）となっていました。あれはユダヤ教の犠牲の祭壇の流れでしょう。しかし神学的に考えて、あれはやはり壁から離し、最後の晩餐の食卓テーブルを指す聖卓（オルター・テーブル）とすべきでしょう。高さはいわゆるテーブルの高さで……。

河野　材質は、重厚な石あるいは一枚の木で、ここには力を入れる必要があります。それは神に対する責任ですね。

西村　聖卓の上に何を置くか、以前の祭壇ですと、よく長いロウソクを置いていました。しかしソビック博士は、ロウソク自体が神秘的にならないよう、あまり長くないほうがよいと言っていました。ロウソクはあくまでテーブルを照らすロウソクです。

徳善　そのほか、聖書や花も聖卓に置くものでしょうか。

江口　聖餐式のある礼拝のときは、聖餐式の道具を置けばよいですが、何もないとやはりさびしいですね。大型の聖書とロウソクぐらいはあったほうが聖卓らしくなります。

河野　いわゆる内陣（チャンセル）（聖壇部）にある聖卓や説教台が移動式の教会もありますね。移動してしまえば、内陣がステージにも使えて多目的利用に便利というわけです。しかし、ルーテル教会の場合、それでよいのでしょうか。

徳善　移動式の多目的に使える礼拝堂か、あるいは固定式の聖なる空間か、理念的にどちらか一方と決めるのはなかなかむずかしいですね。それから内陣部分の壇の高さですが、あまり高すぎないほうがよい。と言って、説教台の説教者や聖卓での動作が会衆席からある程度、見える必要もある。会衆席よりもやや高くというところですね。

西村　説教台の位置は、左右決まっているのですか。

徳善　右か左か決まっていない。しかし真ん中ではない。

河野　説教は神の言葉ですから、語られるとき会衆から見えないといけない。ですから説教台は、いま言われたように、やや高くてもよいわけですね。

徳善　次に洗礼盤ですが、ヨーロッパなど昔は教会堂の入口のところにありました。洗礼を受けて会衆の中に入って行くわけです。ところが今では、むしろ洗礼という出来事が神と会衆の只中で起こることを示すためにも、会衆席の前、つまり聖壇部のところにあるのが普通ですね。

●聖書朗読台、オルガン、音、会衆席

徳善　聖書朗読台も普通、会衆席の前、内陣のところにあるのですが、私はアメリカで会衆の一人が大きな聖書を聖卓からかかえてきて、会衆席の真ん中で読むのを見たことがあります。み言葉の出来事性を感じましたね。黒人の教会でした。

河野　ルーテル教会の礼拝では、音楽性も大切な要素ですから、オルガンや聖歌隊の位置も問題ですね。

江口　オルガンの音、讃美歌の声、また聖歌隊の歌声、これらはどんなに美しくても神の声ではなく、神の声に対する讃美応答ですね。ですからオルガンや聖歌隊の位置は会衆席の側にあるべきでしょう。

西村　司式者と合図できる位置ということも必要ですね。それから音といえば音響の問題もあります。

徳善　音響について言えば、讃美歌やオルガンがきれいに聞こえるだけではだめです。聖書の朗読、説教、これは言葉です。言葉がはっきり聞こえる礼拝堂でないとだめですね。ルーテル教会は、音楽の教会でもありますが、まず言葉の教会なのです。

西村　その点、最近よく見うけるコンクリートの打ちぱなしは、やはり音響的にはよくないのではないですか。木造のほうがその点、言葉などはっきり聞こえると思いますが……。

河野　コンクリートの打ちぱなしというのは、やはり経済優先の機能主義ではないですか。もっとも、本格的な打ちぱなしはむしろコスト高です。しかも、コンクリートは六〇年もつかどうか……。

菅野　しかしコンクリートの打ちぱなしには打ちぱなしのよさもあるでしょう。音響的には確かに問題もありますが、吸音材の使い方で工夫はできます。

江口　実は藤が丘教会はコンクリートの打ちぱなしです。最初、設計段階では、いささか冷たい感じがしないかと心配でしたが、結果的には良かったと思っています。第一、モダンです。今という時代に建築した教会堂ですから、現代性という刻印も意味があります。つまり教会建築には伝統性と現代性が両者とも必要だという気がします。

河野　音は音でも、騒音、雑音の問題もありますね。説教を聞いているとき、その緊張が他の音で中断されるのは困ります。武蔵野教会の場合、外の騒音を遮断するために窓を高くつけてあります。それから子供の泣き声。

徳善　母子室の問題ですね。ヨーロッパでは子供を教会につれて行きませんし、アメリカでもあまり見かけない。母子室を作って、子供の泣き声が聞こえなくなるのはよいが、隔離感があってはよくないですね。

菅野　大岡山教会では、むしろ子供がどんどん礼拝堂に入ってくる。会衆もそれでよいという感じです。

江口　子供の声や泣き声は、同じ音でも、人によってとてもうるさく聞こえたり、そうでなかったりするようですね。「幼な子よ、われに来たれ」とイエスは言われたし、他方、しつけの問題ということもあります。いずれにせよ、なかなかむずかしい問題ですね。

菅野　そこで考えるのですが、そもそも礼拝空間とは、人間にとって全くの快適空間であるべきか、それとも多少は自己を律する禁欲空間であるべきか……。

徳善　そういう整理の仕方もできますが、また次のように考えてもよいと思います。すなわち、子供も共にいる神の家族としての空間、社会の物音が聞こえてくる社会の中の空間か、それとも、そうした全てを遮断したひたすらに聖なる空間か。二つの考え方が、どちらも成り立ちますね。

河野　結局、そのどちらにするかは、その地域性の中で個々の教会が決めていくことでしょうね。

徳善　それから、会衆席の問題ですが、ソビック博士は長イスはよくないと主張しています。しかし、長イスか個々のイスかも、それぞれの教会が決めていくことでしょうね。

●十字架・光・ドア

西村　ところで、十字架はどのように考えたらよいのでしょうか。建物の外に目印としてある十字架、あるいは礼拝堂の中の正面にある十字架、また会堂全体が十字形をしている場合もあります。礼拝堂の中で、十字架をあまり固定しておくと、その十字架を拝むように見えるので、むしろないほうがよいのではないでしょうか。

河野　いや、十字架はむしろ絶対に必要ではないでしょうか。プロテスタントの教会は、もっと美術ということも大切に考えたほうがよいと思うのですが……。

江口　私たちは、そこにある十字架を拝んでいるわけではない。しかし、キリストのシンボルをそこに見るわけです。しかも日本の教会は基本的に伝道教会ですから、伝道という観点からみても、十字架には大きな意味がありますね。

徳善　シンボルとしての十字架そのものが持っているメッセージ性。これが信仰教育という点からみても大切だと思います。

西村　教会の扉、ドアも意味深いですね。聖書にも「狭い門」という言葉がありますし、ルターの九五個条の提題も教会の扉に掲示されたのでしょう。そのドアにどんな彫刻がしてあるか、そのドアは閉じているのか、開いているのか。あるい

はまた、光という要素をどう考えるか。光としてのキリスト。ステンドグラスから射しこむ光。いろいろ考えてみなければなりませんね。

徳善　礼拝堂を非日常的な聖なる空間とするために自然光をさえぎり、少し暗くするという考え方、あるいは逆に、社会全体が昔と比べて格段に明るくなっていますし、聖書の文字を読むためにも、もっと明るくしてほしいという考え方、両者がありえますね。

●未完成の完成

河野　ステンドグラスということで、ぜひお話ししたいのは、武蔵野教会のステンドグラスの絵です。正面の左右にあるのですが、同じような図柄になっています。ところがよく見てみると、一方が少し欠けた図像になっているのです。もちろん、わざとそうしてあるわけです。つまり、神のなさることと人のやることとを、シンボル化しているのです。

徳善　教会も含めて、人間のやること、人間が建てたものの不完全さと、神の完全さですね。神に対する人の不完全さをどう表現するか、これも教会建築の隠された一つのモチーフです。人間は未完成であるがゆえに終末を待望する。終末に向かって旅をする神の民としての教会。この終末性を表現すべきですね。

河野　全くそうです。建築家が人間の完全性を前提にしては、だめだと思います。人間は神の被造物です。そこに教会建築の「未完成の完成」の根拠がありますね。

菅野　それは建築のプロセスで言うと、ロングタイムで教会を建てていく。あのガウディのサグラダ・ファミリア教会のように……。あれはまだ完成していない。

江口　まさに未完成の完成、これこそ、喜ばしき未完成ですね。

徳善　さて、きょうの座談会は、ここらで終えることにしましょう。きょうは教会建築の神学理念的な問題から、建築の諸要素を具体的に検討することにも入りました。こうした諸問題を、きちんと整理して、ぜひルーテル教会としての教会建築の基本的指針を作成すべきですね。どうも長時間ありがとうございました。

(一九八九年九月四日、東京ルーテル教会にて)

注1　ドイツ福音主義教会建築協議会「福音主義教会の礼拝空間形成の原則」(一九五一年)、ブルッギンク他「改革派教会建築規準」(一九六五年)など。――『教会建築』(日本基督教団出版局、一九八五年)に収録されて

いる。

注2　E・A・ソビック『神の民の家――教会建築の理念について』（日本ルーテル神学大学、一九六九年）。

〈エッセイ〉

青年・学生伝道

〈若者は幻を見、老人は夢を見る〉

（使徒行伝二章一七）

西　恵三

本『百年史論集』第一号に掲載していただいたエッセイ「隣人にキリストを」の中に、私が東京に住居し始めた一九四九年（昭和二四年）頃のことを次のように記した。すなわち「住居は本郷西片町にあった同志会という学生寮で、父の友人であった田崎健作牧師が責任を持っておられた本郷弓町教会の聖日礼拝に出席していた」（七二頁）。一九八六年（昭和六一年）に出版された『弓町本郷教会百年史』を繙くと、その第六章青年の項目の第一期の書き出しは、「本郷教会は、もともと青年への伝道を目的として建てられた教会である」（六九五頁）となっている。本郷は東京大学を始め多くの国公立、私立の大学やいろいろな種類の教育機関が集中していた地域で、自（おのず）から最高学府の地、文教の府と目された場所であり、したがって明治期のキリスト教指導者たちがこの土地柄に注目したのは当然のことであった。しかし私が東京で勉学を始めた頃は、現存する日本福音ルーテル教会系の小石川教会も本郷教会も本郷学生センターも未だなかったので、同志会から徒歩距離内にある日本キリスト教団所属の弓町本郷教会に出席するようになったのである。日本のキリスト教界全体は戦後の混乱から急速な立ち直りを見せつつあった頃で、本郷教会にも多くの学生や青年等若い人々が満ちあふれていて、とても活気にみちみちていた。（前述の『弓町本郷教会百年史』一四二頁、7。新時代への始動の節を参照）。この時期に同志会という学生寮に三年間の学生生活（旧制）を過ごすことができたのは、私の人生における最大の好運であったと断言してはばからない。この点を理解していただくために、「同志会」について必要最少限の説明をしておきたい。(1)

同志会は一九〇二年（明治三五年）秋、阪井徳太郎氏を会長として開館式を挙行したと記録にあるので、本年（一九九〇年）で八八年の歴史を持つことになる。この阪井徳太郎会長は一八六八年（明治元年）六月二八日に、士族阪井家の長男として誕生されたが、当時かなり裕福な家も、

明治維新の波を受けて急速に困窮のどん底に陥り、非常に苦学をされたらしい。しかし、その極めて優秀な頭脳と持ち前の奮闘努力の生活ぶりが、当時築地にあった立教大学校長ガーディナー師の目にとまり（一八八四、五年頃）、さらに聖公会のウイリアムス主教という類い稀な偉大なる人格に接して醇なるキリスト教の信仰を得、バルナバ・ティ・阪井となられたのである。一八九三年（明治二五年）、立教大学を卒業後、時を経ずして渡米、ホバアト大学ではB・A、ハーバード大学ではM・Aを、ケンブリッジ聖公会神学院でB・Dを取得、刻苦勉励の末、聖職執事の按手を受けて一八九九年（明治三二年）に帰国された。阪井先生がこのアメリカ滞在中に、あの静かなケンブリッジの大学町で、しかも神学部と教会を中心とした大学制度の中で、アメリカの指導層の子弟の集まる学生寮で送られている日常生活は、当時の日本の実状と比較して真にうらやましく映じ、大きなカルチャーショックを受けられたに違いない。特に日本の将来を思うこと人一倍強い先生は、この学生生活の時にすでに同志会設立という幻を抱かれたのではないだろうか。帰国後未だ年若い先生は、何をもって日本に奉仕するのが最も神に喜ばれる道かを思い巡らしたであろう。伝道者としてか、また外交官としてか、はたまた実業家としてか。先生は何を選んでもその能力を充分発揮し、それぞれの方面で最高の業績をあげられたかたである。「米国人よりも英語のうまい阪井」の評判は、ポーツマス講和会議における小村寿太郎全権とルーズベルト大統領との連絡係の労を取った金子堅太郎男爵の随員として渡米活躍され、帰朝後は農商務省、外務省、内閣等で仕事をされたが、小村公使から大隈重信氏の紹介を経て富豪渋沢栄一氏の知遇を得、三井合名会社の重役として長年過ごされた経歴を見ても明らかであろう。しかし先生の若き日に抱かれた幻は、その結実に向かって着々と進んでいた。第一回のアメリカ留学を終えて帰国後、直ちに（わずか四カ月後）滞在中に知己として得たアメリカの資産家や友人の紹介を経て富豪を訪問し、東奔西走ほとんど寝食を忘れて学生寄宿舎の設立資金集めに奮闘された。その一方で、インドのデリーにアシュラムをたずね、またイギリスでは有名なイートンの寄宿舎を視察する等、同志会の構想をまとめて一九〇二年（明治三五年）の春に帰国、すでに記したようにその年の秋に開館式の挙行となった。このように、先生の同志会設立に対する熱の入れ方は大へんなものであったことが容易に理解できよう。このような話は、私が同志会に在寮中に葉山の別荘を訪問したおり、直接に阪井会長より伺っ

たり、また同志会の諸先輩の口を通して聞かされたものである。私が未だ東京大学在任中の一九七三年秋、短期間であったがケンブリッジにあるハーバード大学天体物理学研究センターに滞在を許されたおり、若き日の先生が学ばれたであろうハーバード大学の校内を歩き、静かな大学町に散在する学生寮の雰囲気に触れることができた。またイギリスではオックスフォード大学の学生寮での落ち着いた気品の高い談話会等を通して、先生が一生涯をかけて日本に残そうとされた貴重な仕事の萌芽を感じ取ることもできたのである。こうして熟慮推敲の末「本会綱領」を定められた。即ち「我等は基督教の主義に基き東京帝国大学学生中品性を修業し知性を啓発して基督教的人格を作らんとする同志を以て成り、此の目的の為に清高和楽なる家庭を組織するものなり」である。

第二次世界大戦直後の日本は、すべての人々がそれぞれ苦しみの中をくぐりぬけて来たが、私もその例外ではなかった。そしてやっと東京大学での学生生活の再開、弓町本郷教会での青年たちとの交わり、同志会での生活を通して、人間存在の根源に触れる貴重な思索が自由にできる落ち着いた環境を取りもどしてほぼ一年が経過した時にオラフ・ハンセン師との出会いがあったのである。ハンセン師も日本の伝道に大きい意欲をもって新しい希望に胸をふくらませて仕事を開始された時である。当然多くの質問を私に提示し、私もできる限りの知識を総動員して応じたつもりであったが、時には非常に激しい議論となるべきところも、私の語学力の未熟が論争の仲介となったという記憶も多く残されている。その中で、ここでは特に若い人々（青年層、学生等）への伝道に関するものを書いておきたい。

ハンセン師の質問に対し、私は最終的に二つの提案をもってそれに応えた。第一は学生寮の建設である。当然のことながら、私は同志会における約一年の経験を基にして、その寮生活がキリスト教伝道には極めて有効であることを力説した。日本全国に散在するルーテル教会の会員の子弟や、教会に集まる青年のかたがたが東京での数年間の学生生活で起居を共にし親交を深めることは、各個人の信仰生活にとって重要であることは言うに及ばず、人生における将来の進路に多大の貢献をすることになろうし、いずれ彼らが日本の社会的な面でも指導的地位に貴重な人材となると同時に、ルーテル教会にとっても将来を担う強力な信徒となるであろうというのがその骨子であった。人数は十数名ないし二〇名程度の小規模で、東京大学などの国公立系に限らず私立系大学にも広く開放し、入寮者の自主を原則

にして、あまり詳細な規則は作らず、同志会で three minimum duties として守られているようなもの、①毎日朝食前の短い礼拝、②週一回の夕食会と礼拝・感話会（同志会では毎金曜日に行なわれているので金曜会と称している）。③日曜日は教会の礼拝に出席すること、等であった。そしてハンセン師を数回にわたって同志会に招待し、金曜会での感話やバイブル・クラスの指導にひっぱり込んでその宣伝に努めた。彼は多方面から熟慮したようであったが、ついに賛成してくださるまでにはいかなかった。その理由の要点は、①指導者、②経済的に将来教会が責任を持ち続ける可能性に対する不安の二点に要約できると考えている。それでは、宣教師のかたがたが英語で聖書を教える、いわゆるバイブル・クラスを複数個準備すれば、最初は英会話を習得するつもりで出席した学生たちの中には将来どこかの教会に連なる可能性もあろうし、キリスト教関係のものを主とした図書室を併設すれば、読書や思索に集まって来た学生たちがお互の交わりを通してすばらしい群れに成長してゆくのではないか等……現在本郷の学生センターで行なわれているような内容の提案をしたところ、このほうは非常に乗り気になって早速準備をしてほしいということになった。そして静岡県島田市に派遣されて間もないK・ステンバーグ師がその任にあたる運びになり、小石川教会の敷地内に教会堂とは別棟に併設されることになる。このような学生センター式の方法は、アメリカやヨーロッパ等のような長いキリスト教の歴史を背景に持つ社会にはうまく適合できるだろうが、事情の異なる日本では期待どおりの成果があげられるかどうかという心配に関しても話し合った。特に宣教師のかたがたと協力してその指導にあたる日本の教会側の教職のかたの選定には大変苦労するのではないかという点であった。召命観に満たされ、神学方面の教育を修めて按手礼を受けて教職となられたかたは、ご自分の手で信仰の種を蒔いた人々について、その人の信仰面での成長が自分の手の届く群れの中で洗礼を受け、教会員となり……という現実的な実りを目のあたりにしたいとの強い願望があるのは当然である。学生時代に種を蒔かれても、卒業と同時にキリスト教的な背景の皆無に等しい日本の社会に送り出され、多忙を極める職場での厳しい生活との戦いのゆえにいつしか信仰の種も発芽しないままになってしまう可能性が高い、そういう仕事に喜んで参加される教職を見いだすのは至難なことではないかという点であった。

このような指摘が、慎重で思慮深かったハンセン師に、とりあえず学生センターを小石川教会の敷地内に併設する

という決断を持たせたのではないかと考えている。こうして一九五三年（昭和二八年）九月二〇日、東京福音ルーテル教会（現小石川教会）の献堂式の日に学生センターの建物も献堂の運びとなった。

しかし私の危惧が想像に止まらないことをハンセン師が気づくには長い時間は必要としなかった。小石川教会の牧師は学生センターには直接仕事上の責任は無いという了解があったとはいえ、隣接している教会に日常的な負担が皆無というわけにもいかず、小石川教会も開設して間もない頃であるという事情もあって、早急に学生センターは別の場所で活動するほうがよいということになった。そして「なるべく大学の近くがよい」という名目のもとにステンバーグ師と文京区を中心に広範囲に調査し、最終的には東京大学農学部前から路地を西片町寄りに入った所に家屋を購入して一時そこに落ち着いたが、間もなく現在の地東京大学前の郵便局裏側に建てた三階建（一階・学生センター、二階・礼拝堂、三階・牧師館）の中に収まったのである。ここで留意していただきたいのは、現在は本郷教会と併設されているという点である。すなわち教会を牧される使命と責任を持たれた教職がその本来の召命観に満足を覚えつつ、宣教師のかたがたと協力していわゆる学生センターと

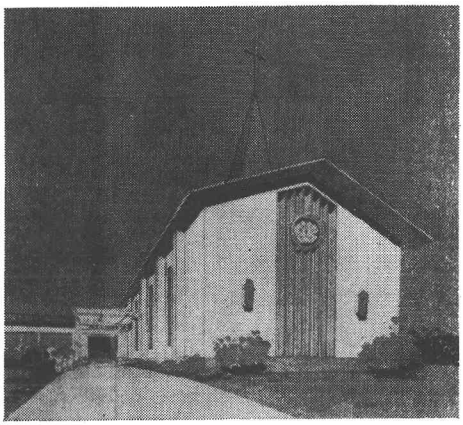
1953年、東京福音ルーテル教会（現小石川教会）および
併設された学生センター献堂式

いう活動に従事するという方式が、日本という社会環境の中に適合し永続きするのではないかということである。前号にも記した、このたび徳善先生が収集された Archives の中に、一九五〇年九月二一日シカゴにおける「日本における仕事」についての全ルーテル教会委員会集会報告があり、その第二項目に Youth Center in Tokyo とあり、ⓐ Domitory for Lutheran students, に続いてⓑⓒⓓⓔⓕの項目を見ると、時期的に考えて私がハンセン師と談話した多くの事柄の要点はこの集まりで報告されていたような気がしてならない。その波を受けて日本福音ルーテル教会（合同前）のほうでも同様の学生センター計画が考えられ、場所として現在の市ヶ谷教会の地が定められ、担当牧師として田坂惇巳先生が任命された。この事を耳にして早速私は田坂先生を訪ねた。ELC系のほうでの学生センターの計画を説明したり、伝道経験の極めて豊富な先生のご意見を伺うべく参上したのである。先生は私の意見に深い関心を持たれた様子であったが、ご自分の気持ちを精一杯ぶちまけるには相手が余りにも若僧と思われたのか、やわらかい語調でその心情を語られたという印象を受けた。しかし時を経て「砂土原町一丁目一番地の二十年」の中の〈歴史の証言・草創期〉「学生センターと市ヶ谷教会」の冒頭に、「昭和二五年七月、二ヶ年のアメリカ留学を終って市川教会に任命され、中山教会を兼牧した。その後二年たって新しい学生センターを創設すること、そして初代の責任者となるようにとの相談をうけた。正直に言って、まだその働きの性格もはっきりしない仕事に心が進まないので断った。私は市ヶ谷に教会を新しく創設せよと言われるなら、去りにくい市川教会を去る決心はつきやすかった。それで〝学生センター〟といっても、名目は〝学生伝道〟であるとはいうものの、学生の〝たまり場〟みたいなものの管理人になることならまっぴらだと答えた」という文章を発見して、当時の田坂先生の心情をかなり正確に理解していたと安堵の胸をなで下ろしたのを憶えている。その後、市ヶ谷教会も学生センターの働きと共存の型が続き、岡田曠吉牧師が在任中にクライダー寮が設立された。（詳細に関しては、この仕事に直接関係されたかたが多数おられるので、適当なかたにまとめていただきたいものです）。アメリカ・ニューヨークの牧師クライダー師の息子さんが朝鮮戦争で戦病死され、その生命保険金を基にして設立された学生寮と聞いている。前にも述べたように、同志会のような働きを希求していた私は、その存続に非常な関心を持ち続けていたが、経済的な面とか、世相の急激な変化に伴う学生生活の様式

昭和二十八年（一九五三年）九月二十日午前十時

東京福音ルーテル教會

献堂式



東京都文京区林町七十一番地（丸山町停留所前）

式次第（原寸）

献堂式次第

第一部　朝禮拜　十時

一　前奏
二　開式の祈り
三　讃美歌　一五二番
四　十誡
五　懺悔
六　キュリエ
七　恩寵の言葉
八　特禱
九　使徒書　エペソ書三ノ一三―二一
一〇　讃美歌　聖歌隊合唱
一一　福音書　ルカ伝七ノ一一―一七
一二　使徒信經
一三　献金　五三八番
一四　説教　「祈りの殿堂」　河島牧師
一五　祈禱
一六　讃美歌　聖歌隊合唱

第二部　献堂式

一　讃美歌　一七二番
二　聖書　列王上八ノ二二ー三〇
三　讃美歌　一七一番ノ一節
四　聖書　詩篇第八十四篇
五　讃美歌　一七一番ノ二節
六　聖書　詩篇第百篇
七　讃美歌　一七一番ノ三節
八　聖書　マタイ傳一一ノ二五ー三〇
九　讃美歌　一七一番ノ四節
一〇　聖書　ヘブル書一〇ノ一九ー二五
一一　奨励　ハイランド師
一二　献堂　ステンバーク師
一三　頌詠　スエンサイド師
一四　祝禱　サノデン師
一五　祝辞　イングルスルード師
一六　感謝状贈呈　オラフハンセン師
一七　諸報告　オラフハンセン師

五六六番

第三部　茶話会

の変化とか、市ヶ谷教会所在の土地がいわゆるアスマラ宣言による日本福音ルーテル教会の自給という目標のもとに進められた計画の一つにくり入れられてルーテル市ヶ谷センター設立となった段階で、市ヶ谷教会のみが存続し現在に到っている。

私がハンセン師に示した第二の提案はBible Campである。大阪の天王寺教会で当時の牧師、小泉昻先生（現京都教会牧師、小泉潤先生の父）に指導を受け、一九四〇年（昭和一五年）イースターに宣教師トウラクソン師から受洗した私にとって、日曜学校の時代から第二青年会（主に旧制中学生が集まった会）時代を通じて、戦時中であったとはいえ時々関西地方所在の京都や神戸の教会のかたがたと合同で開催された一日修養会や数日の夏季学校のおりに受けた勉強や交わりが、信仰の成長には非常に有益であった。このことを説明し、特に若い人たちや学生層を対象にしたBible Campを計画したらいかがですか、もしその準備が必要ならば私がやってもよいからと言って提案したので、このほうは直ちに採用され、浜松に派遣された宣教師L・ジョンスルード師と、島田に派遣された宣教師L・デビッドソン師（このかたはK・ステンバーグ師の後任）との三名が準備委員となり、計画を始めた。会場の候補地や日程等を含め数カ所を検討の末、山中湖畔にあるYMCAのキャンプ場に白羽の矢を立て、まず現地を調査しようと行動を起こしたのが一九五二年（昭和二七年）の一月頃であった。当時はまだ道路状況も極めて貧弱であった上に、東海道側から峠を越えて山中湖に入ったので、雪の中を大へん苦労して走行したのを記憶している。そして現地での調査結果をいろいろな方面から検討した末、神田のYMCA本部に申し込みに行ったところ、すでに七、八月中のかなりの部分が予約済であり、八月も末に近い頃しか獲得することができなかった。こうして第一回目の夏季聖書学校は一九五二年（昭和二七年）八月二五―二九日に開催された。河島亀三郎牧師は『日本福音ルーテル教会東海教区二十年史』の中で、「八月二五日～二九日の間、富士山麓山中湖のYMCAキャンプ場で始めてのバイブル・キャンプが開かれ、東京、静岡、島田、浜松の各教会から若い人々が集って聖書を学び、討論し、そして又舟遊びをたのしんだ」（一二頁）と記しておられる。当時は若い人たちが楽しむための重要な要素の一つに、充分な食料が整えられるということがあった。これは、食料事情の全く異なる世相に育った現代の若人には理解が困難かも知れない。参加者全員に、国が定めていた配給に相当する分量の米を持参していただ

いたが、当然それだけでは不足するのは明らかであった。YMCAキャンプ場の管理人もそこの事情はよく心得ていて、お金さえ準備していただければ不足分の米は準備できる旨私に伝えてくれた。予算に関係することなので当然宣教師のかたがたに相談し、参加される若い人たちに満足してもらえるだけの食料を準備すべきだと主張したのであるが、デビッドソン師は、教会が行なう行事であるので、いわゆるヤミ米を使うのには反対である旨を主張してなかなかゆずらなかった。しかしジョンスルード師は、私が師の任地である浜松への旅行や宿泊地における私の食欲を見ていたのか、あるいは別の宣教師宅へ時々招かれた時の食事のとり方が話題になっていたのかは知らないが、(とにかく飢えていた一学生の訴え方が余りにも真にせまっていたせいか)、全く内密に、充分なだけの米が備えられた。食堂に集まった若い人たちが極めて満足気に食事するのを眺めて北叟笑(ほくそえ)んだものである。そしてその時、主講師には稲冨肇牧師を招いたのであるが、先生の熱弁ぶりも冴えに冴え、先生ご自身も感激の余り講演台の上に登り、両手を大の字に拡げて叫ばれ、参加者全員が霊肉共に豊かに満たされたのであった。会期中まことに幸運にも霊峰富士は「紅富士」というすばらしい自然現象を、二日間にわたって私どもに

1952年，山中湖畔の YMCA キャンプ場で開かれた
第１回夏季聖書学校の参加者

提供してくれた。YMCAキャンプ場は早朝に眺められるこの絶景をたのしむのに最適の場所にある。その富士山を背景にした参加者全員の記念写真をご覧いただきたい。第二回目の夏季聖書学校は一九五三年（昭和二八年）に行なわれたが、第一回目の評判がよかったせいか参加者が多すぎたため二班に分け、八月一七―二〇日、二〇―二四日としなければならなかった。このような気運に押されてか、もっと多くのプログラムを計画することができるようにと考え、自分たちのキャンプ場を持ちたいということになった。数カ所の場所が候補にあげられたが、最終的には静岡市梅ヶ島が最有力となり、その年の秋も深まろうとする一〇月二一日に視察が開始された。その次の年の一九五四年（昭和二九年）には、キャンプ場建設の途中であったために会場は御殿場の東山荘が用いられたが、一九五五年（昭和三〇年）梅ヶ島キャンプ場は完成し、七月一九日に献堂式が行なわれ、続いて第一回のバイブル・キャンプが開始されたのである。その時の講師陣には、岸千年牧師をはじめ、池田政一牧師、吉田希夫師があたり、もろもろの準備から諸集会の世話係には若き日の岸井敏牧師や大柴俊夫牧師（両師とも当時は未だ神学生）、宣教師陣にはR・サノデン師、M・ソレンソン師、G・ボーランド師がその任にあ

梅ヶ島キャンプ場における
第一回バイブル・キャンプのスタッフたち。
前列左から、岸千年牧師、池田政一牧師、吉田希夫師、
後列左から岸井敏牧師、R・サノデン師、M・ソレンソン師
G・ボーランド師、西恵三、大柴俊夫牧師

たった。私は Dean of Men として参加した。(Dean of Women は岸千恵姉)。その後、梅ヶ島のキャンプ場は東海地区にあるルーテル派諸教会のみならず広く一般にも開放され、現在に到っている。このキャンプ場では実に多くの若い人たちが信仰の種を播かれ、よき信仰の友を得、それぞれの教会で受洗し、現在は教会の重鎮として役員等の働きをされているのを見て、神の御業の深さを見るのである。

　このようにして、私がハンセン師に希望した二つの提案のうち、同志会的な学生寮建設[2]以外は、宣教師や牧師の先生がたの綿密な立案・計画・予算化を経て実行に移され、その成果は現在のルーテル教会を支えている多くの教職や信徒の育成に重要な役割を果たしてきたと確信している。その一方で、実現することなく終わった同志会的な学生寮建設という夢についても、未だあきらめきれないでいる自分自身に気づいて驚くことがある。前に述べたアスマラ宣言による日本福音ルーテル教会の総合自立という決断に伴う小石川教会所在の土地利用という観点に立って、長期間にわたる本教会と小石川教会の話し合いの末、小石川教会は「文京カテリーナ」という約一五〇名収容可能の女子学生寮と併設されて現在に到っている。(詳細は『日本福音ルーテル小石川教会三十年史』を参照)。人間の思考をはるかに超えて神がお与えくださった解答が、この経緯の中にあるのではないかと考えてみたこともしばしばであった。たしかに時代が急激に変化し、若者たちの人生観や価値観等生活様式もはげしく変化してゆく中で、明治に生まれ大正時代のやり方で行なわれてきた同志会的な形式を保ち続けることは、ほとんど不可能に近いことも理解できる。現に同志会自体が非常な困難のもとにあることは、後出(注1)の『阪井徳太郎と同志会』の中の「同志会存亡の危機とその回避策」(二三三頁)の項目を読むと、かつてハンセン師が反対の理由としてあげた警告の一部を見せつけられているような気がして、その炯眼に驚くのみである。老人の夢とは、どのような時代にあってもその時代に適したやり方で、次の時代を担う若い人々に、次の時代にルーテル教会の信仰を正しく伝えていただく青年のかたがたに、最適の方法を見いだして実現しておくことではないだろうか。百年史委員会で時々口にすることは、「私どもは二百年史をまとめる人たちのことを考えつつ記録を整理し、間違いのない事実を正確に書き残そうではないか」ということである。ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が来日のおりに日本に残していかれた言葉、「過去について語るのは、未来に対して責任を持つことです」を基にして考えるなら、現在まで持ち

続けた夢を夢のまま未来に残してゆくのは、全く無責任の極みではないかとしきりに反省しつつ、稿を閉じることにしたい。

注1　詳細については『同志会七十年史』一九七三年（昭和四八年）発行。『阪井徳太郎と同志会』一九八八年（昭和六三年）発行、および『同志会会報』一九五二年（昭和二七年）創立五〇周年記念号、以降、現在まで毎年一回発行の全会報等、同志会関係の出版物は、日本ルーテル神学大学図書館に寄贈されているのでご参照いただきたい。

注2　本郷学生センターと本郷ルーテル教会とが共同でその施設拡充に関する申請書を一九六二年（昭和三七年）一二月一日付で東海福音ルーテル教会およびアメリカ・ルーテル教会日本伝道部に対して提出しているが、その中で「ルーテル教会の学生のために、何らかの種類の学生寮がつくられることが必要である」と述べている。しかし、小石川教会から一時居を移していた農学部前から路地を西片町寄りに入った家屋を学生寮として使用可能なように改装するように要望したことは承認されず、現在の本郷学生センター（一階）、礼拝堂（二階）、牧師館（三階）の要求だけが認められた。（Archives of E. L. C. より）

あとがき

第三号は第二号からのつづきが中心となった。いずれも今号で完結である。ヴィクナー氏の論考「アメリカ・ルーテル教会の世界伝道」（その二）からは、アメリカ・ルーテル教会の世界伝道全体の歴史的俯瞰図が与えられ、そのなかに日本のルーテル教会を位置付けることが可能となろう。

坂井氏の「山内量平評伝」も完結である。日本のルーテル教会の、この最初の邦人牧師を、資料に基づき、しかも愛情を込めて描き出して、力作である。

「教会建築の歴史と現代」の座談会（第二回）は、第一回の総論的展望を踏まえて、日本のルーテル教会の教会建築の今後を考えるものとなった。「日本福音ルーテル教会教会建築指針」のようなものが、ぜひとも必要であるというところまでは至っていると思う。

三回にわたる西氏のエッセイは、戦後、福音ルーテル教会（ＥＬＣ）の日本伝道開始のころのエピソードを伝えて興味深かった。一応今回で終わるが、やがて改めての登場をお願いしたいものである。このエッセイ欄には、日本福音ルーテル教会百年の歴史のなかでのエピソードや随想などを寄稿いただきたいと願っている。このような本文組で四―五ページ分、原稿にして四〇〇字一〇枚前後に、適当な写真などを加えていただけるとありがたい。第一号や第二号での呼び掛けに応えて、既にいくつかの寄稿をいただいているので、順次掲載していくつもりである。

第四号からは、門脇氏による「日本福音ルーテル教会のディアコニアの歴史と働き」、および、シリーズの座談会の形で、戦中戦後から現在に至る日本福音ルーテル教会を展望する企画を進めている。また、戦後の日本福音ルーテル教会の教会教育との取り組みについての論考を待っており、私自身予告しつづけている、「初期のミッション・ボード

と最初の宣教師たち」をぜひまとめたいと考えている。若い牧師たち、あるいは、青年たちから、特に、日本福音ルーテル教会の、教団合同と離脱にかかわる研究の問い合わせもきている。資料の掘り起こしも含めて、いろいろな取り組みや解釈と、討議も必要と思われ、こうした気運を歓迎したい。

百年史委員会　委員長　徳善義和

日本福音ルーテル教会百年史論集　第3号

1990年5月31日発行　　定価1000円
（本体970円）

発行者　前田貞一
発行所　日本福音ルーテル教会　162 東京都新宿区市谷砂土原町1—1
編集者　日本福音ルーテル教会百年史委員会
製作者　聖文舎プロダクション

印刷・製本／精文堂印刷株式会社

『百年史論集・第１号』Ａ５判　104ページ　定価1000円（税込）
内容「日本における都市伝道について」隅谷三喜男
「アメリカのルーテル教会　日本伝道開始のころ」徳善義和
「礼拝式文史」前田貞一
「エッセイ・隣人にキリストを」西 恵三
「日本福音ルーテル教会と社会問題との関わり」古財克成

『百年史論集・第２号』Ａ５判　96ページ　定価1000円（税込）
内容「アメリカ・ルーテル教会の世界伝道」（その１）ヴィクナー
「山内量平評伝」（その１）坂井信生
「座談会・教会建築の歴史と現代」（その１）
「エッセイ・初めに言があった」西 恵三
「書評・博多ルーテル教会80年史」白川 清
「日本のルーテル教会の歴史叙述」徳善義和

定価1000円（本体970円）